

山河
中井
古醉
洞茗
畫著

多子花





四十年四月十日 女子文壇社 贈

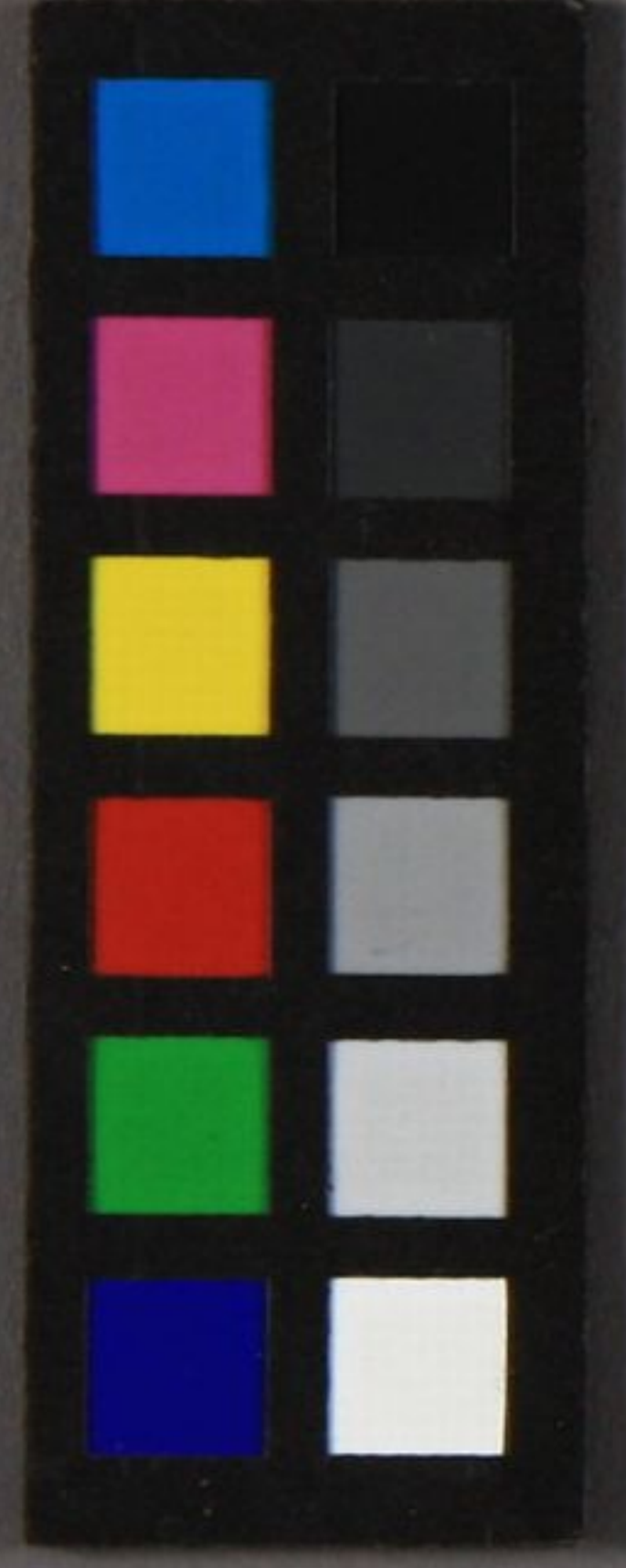




山河
中井
古醉
洞茗
畫著

四十年四月十日香才主壇君送國書切符江依贈也



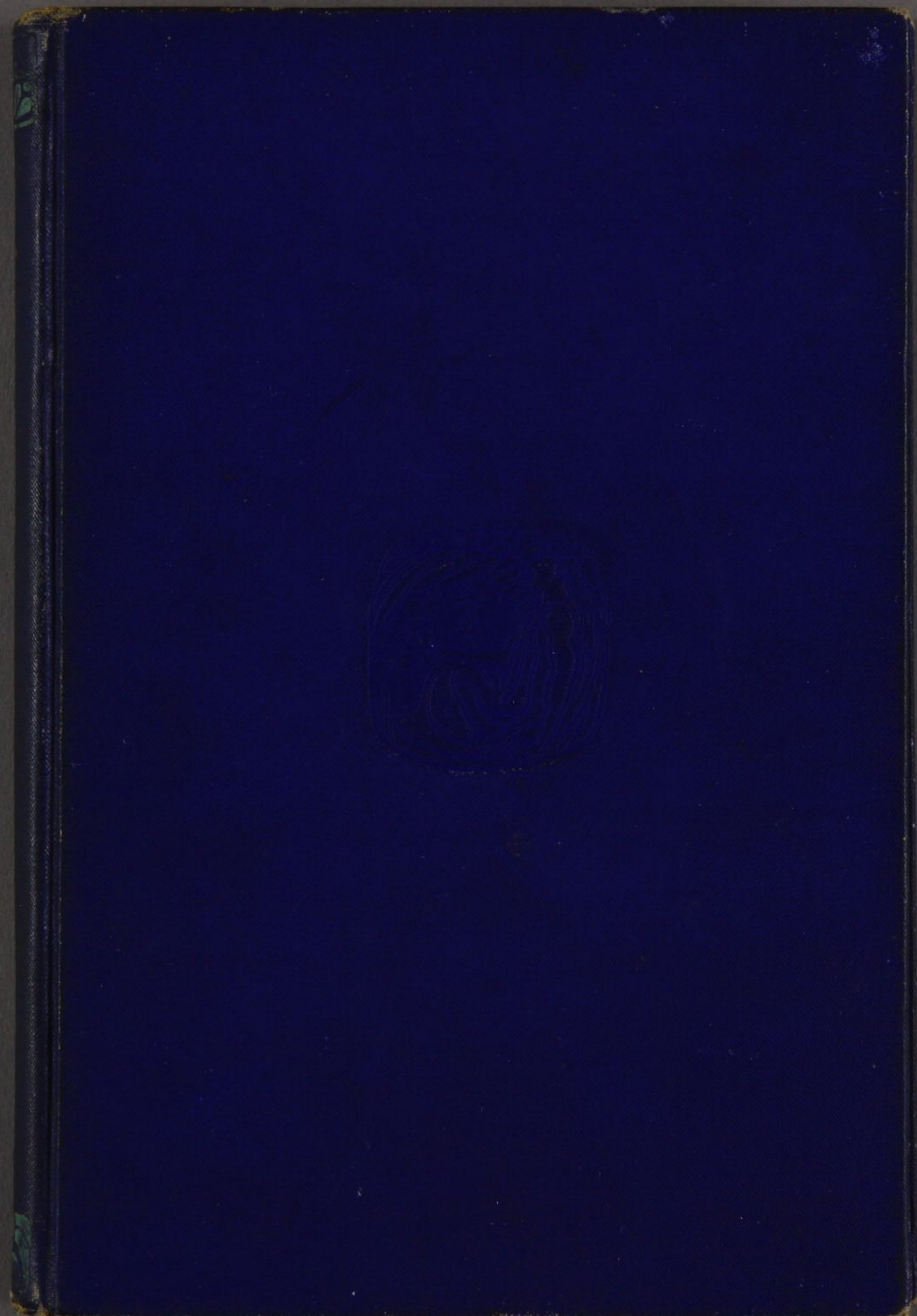




玉むし

河井醉茗著









花守ぬ

此書を故郷なる
従妹に與ふ





筆洞古山中

姉妹	をさな草紙	渡りぞめ	夕焼	氷山	若葉の家	吾行く道	舞少女	廢城	戀ごもり	天香山	暗き谷	濱名湖物語	幹に刻める	笛物語	幼き富士	廢屋
.....
一	四	七	二	五	八	三	五	六	三	三	六	四	四	四	三	七

目次

春意	六二
草薊	六四
手紙の端に	六七
冬の日影	七〇
火性	七三
詩人村	七六
天なる戀	八〇
鶯のゆくへ	八三
林檎	八七
雨夜の占	九〇
詩人の家	九三
木の葉	九六
眠らんとして	九七
大和三山	九八
夜の戸	一〇五
塔下の少女	一〇六
軍人町	一〇九
朝餐晩餐	一一〇

昔の戀	一一五
夕暮日記	一一六
故郷の家	一二〇
終點まで	一二三
落葉を焚く歌	一二四
狸囃子	一二七
若荷の子	一三〇
歎を止めて	一三一
懸想文賣	一三三
故國の音楽	一三五
新年の家	一三六
我子	一四一
歳の暮	一四五
吾家の花	一四八
哀江頭	一五四
手函の薔薇	一五六
さしやき	一六六
愛子の死	一六九

いのり	一七六
片羽を奪へ	一八一
駿馬	一八四
繪師	一八五
畫顏	一八八
紫苑	一九九
海の幸	一九九
高野街道	一九三
朝顔の葉	一九七
わが家の正月行事	二〇〇
くもり空	二〇四
五尺手拭	二〇五
玉蟲草紙	二一〇

(目次終)

玉

蟲

河井醉茗作

姉妹

姉のお雛は世に董ほど哀なる花はあらじと、離の下、松が根のほとり、廣き我庭の隈々を求めて、若し一本にても見出し、時は、戀に醉る人のごと、身は夢か現なの言しらぬ樂しき境に遊べる心地して、春は董と少女の爲に闌なりさ。

次の文子は世に撫子ほど懐かしき花はあらじと、小さき鉢に植並べて、露もつ朝、風そよぐ夕、色を盡して咲變るを此上なう愛てはやして、知らぬまに人や摘まむと花に心も安からざりさ。

妹のお美代は只桔梗を美しくしく思へり、庭に養へる、野に生ふる、花賣娘の持ち來

れる、若き胸にいづれ分かず、皆美しくしと思へり。
 詩人、都より來りて一夜、少女の家に宿る、彼は求めて名こそあらはさね、湧くが
 如き詩想は、情に燃ゆる子の胸に新しき泉の響を傳へぬ。ゆくりなく董の詩を作り
 しに、姉なる少女はよくと打泣きぬ。

詩人は再び都に上らずなりぬ、少女のなさけにほだされし故ならず、知らぬ間に董
 の花の止めしなりと。そは後に詩人の自ら語れる處なり。

もと同じ里に住みて今は都に在りと云ふ繪師が、心に籠めて描きたる撫子の姿を文
 子は我ものとなしぬ。文子は繪師を一目見んことを願へどかなはざりき、都はあま
 りに遠ければならむ。

秋は初風の軒に通ひて月細き夜を、笛の音に誘はれて末の妹は一人野邊をさまよひ
 ぬ、一歩づゝ笛の音は近づけり、世心おぼつかかなげなりし少女の、はげしき戀を知
 りて、ふり仰ぐ空に紫の花の幾片となく翻るを、少女の魂は追はんとしぬ。花片は

果なき空に消え去りぬ、笛の主は草より現はれて少女の爲に語るらく、君も亦もの
 の音に哀を知りたまふや、都に「桔梗」と名づけし名笛を秘藏する樂師あり、今我傳
 へしは其秘曲の中の一節のみ。

あ美代は歸りて姉に言ひぬ、姉君よ、都に上りたまはずやと。

繪師も樂師も都には多けれど、撫子を描く繪師と、桔梗の笛もてる樂師とは探り當
 らざりき。されど都に上りたる姉妹は、里に歸らんと思はず、塵にさまよふを神は
 愍と思したまへり。

繪筆もてると、笛もてると、今は都にあらざるよしを誰か知らむ、只、撫子の花と、
 桔梗の花とは、都の空にもなつかし清し。

をさな草紙

「こたへ」と揚ぐる師の鞭に
はなじろみする我にして
何そら言をたくむまで
今日の學びの身に泌まぬ

偽り歸る門の外
うしろ見らるゝ早脚に
向ふは常の家路ならで
外れし堤の岸づたひ

水車守る渡守る

低き藁家の乙娘

清書を我に示すとて

草紙つゞりて持てる哉

眞名のいろはをくづすら

覺束なげの友にして

何に染みけん世心の

いつか間遠になりそめて

人はさかしき都路に

學びのたけを競ひつゝ

岸にみかへる幾年の
昔の夢の水車

渡りぞめ

橋は幾度か水に押し流され、幾度か又架換えたが、いつ迄も其の名は「お梅の橋」である。

「お梅の橋」の架つて居る處より、川上へ行つても、川下へ行つても、約そ十里の間といふものは、外に橋は一つもない、川上へ溯る程、山と山との間が迫つて、雑木や、笹や、茅やが、岸を埋め水を覆うて、遂には川に沿つて行く道もなくなつて了ふ。

川下へ行くと藍甕のやうな深い淵もない代り、流れは急に瀬が早いので「お梅の橋」のかゝる迄は、對岸の人と此方の人とは交通することが出来なかつた。

橋の名のお梅と云ふのは優しい女であつた、若い子の誰れも持つといふ戀人を彼の女も持つて居た、その戀人と云ふのは、一寸落葉を搔いて來た歸りに、顔見られる

やうな近い所には居なかつたので、かりそめにも十里の流れを隔て、鳥の通ふ川向ふの里に住んで居た。

お梅は伶俐な女ではなかつたけれども、戀のために賢しくされた、自らかせいで身自ら貯へて、橋架ける代を積まうと思つた、お梅が橋を架けやうと思つたところは恰當、兩方の岸から一枚岩が物言ひたさうに突出て、それをさかるとするかの如く、水の流れの静かな處であつた、水嵩がまさらうが、減らうが、ゆるくならうが、早くならうが、少しも頓着せず、今にくと胸にかけたる戀の中橋、いつしかと、ろくと馬の蹄にさへ渡り易さうに踏みならして「お梅の橋」は架けられた、併しながらお梅がこゝを渡る時分には、もう昔の春は過ぎ去つたのであるけれど「四十九

じやもの花じやもの」、戀はいつでも年の初めのやうに若返へらせる。爾く最初よりお梅の橋には深い意味を持つて居たが、幾代々の風と雨とに欄干も朽ち、橋柱には苔の衣をつけて、村人の親より子に傳へ、子より親に傳へた物語も、

消えうすれて了つた、然るにお梅の名も橋にばかり残るやうになつた後、今に到つて迄、昔の事は知らぬ村人が、この橋を新しく架換へる毎に、渡初の式に一つの古例が残つてある。

此方の岸からは形のうつくしい女の小童を一人、前方の岸からは姿のりゝしい男の小童を一人づゝ撰んで、男の小童には熨、女の小童には媪の木像を抱かせて双方から渡り初めをさせるのである。

木像は誰れが彫つて、誰れが鎮守に納めたか、知つて居る者は一人もない、常は祠の奥の、光もさすかさないやうな薄暗い處に、人間の聲もさかずに在すが、いよいよ渡り初めとなると、外へ出して塵を拂ひ姿を淨めて童に持たせる。

荒木ながらも新しく架つた橋、昔ながらの水も、今日ばかりは別の流れを作つたやう、岸の兩側には、村の長も、山賤も、柴刈る少女も、敬しく木像を擁して居る、此方から一步、前方から一步、しづくと渡り初めて、橋の中央で、熨と媪の向ひ

合つた時には、如何に其の像が活々としたであらう、岸に立つてる人々は一言も出さず、肅然としてみまもつて居る。
下ゆく水の音も、木立の奥の鳥の音も、木像の耳に聞えるであらう。
村の長も、山賤も、柴刈る少女も、木像の渡つた後で、よろこばしさに橋を踏みならしてゆく、例へば戀に若がへつた人のやう。

夕 焼

西に切れたる雨雲は
緋の笹縁を縫ひそめて
天が紅刷く天童の
光を反映す野に山に
林の色も黄みたり

巢を忘れざる家鳩の
羽を收めて歸るごと
野より市より黄昏の
人は吾家に歸る時

夕焼うたふ子等が群

稻穂麥穂に育ちたる

野路の子何を疑はむ

晴を占ふ紅ゐの

天の潮に溶けゆきて

雲一筋の浪もなく

柳の枝を鞭に振り

矜り上なき男兒の

執着持たぬまなじりに

流るゝ如き夕映の

天の藝術はかゞやかむ

てるく坊主忘られて

幼き贄は南天の

葉末重げに残し置き

母の膝より毬の如

すべり抜けては拍子よく

夕焼小焼

明日天氣なほれ

なほれと唄にうたふ子の

今宵の夢や繫がざる
 牧場の駒の駈出て、
 をめず怯れず人の世の
 晴たる空にさめいでむ

氷山

戀の爲に美しくしき罪の子なりしリリーは、惡魔の手に人の世の衣を奪はれたり、天使、リリーに告げて、清き清き處に汝の身を終らしめば、更に愛の國の神となさんと曰へり、山には刺ある樹あり、海には濁れる浪あり、リリーほとく惑ひてキュピットの前に身を投げ伏しぬ。

身を捧げたるリリーをキュピットは可憐と思して、南の島の樟腦の洞にゐて行けり、リリーの肌は高さ馨を放ちぬ、リリーの姿はつややかなる石もて刻みたらんが如く光り添ひぬ、其垂れたる乳房は白百合の眠るが如く、其細き髪はギレアデ山の山羊の頸に似たり、キュピット更に愛の國に使用する鳩を呼びて、其小さき翼をリリーの撫肩に與へ、さらばよりリリー、天は高し、汝の思ふ處に翔れ。

ヒマラヤの峯は雪高うして星近し、神は羊の毛衣を贈らんと曰ふ、されどリリーは

受けざりき、崑崙の山珠多し、神は眞球白球白きたな首に飾れよと曰ふ、されどリ
 リーは受けざりき、ゴビの砂原風騒げども翼疲れず、バイガルの湖月静かなれども
 船をおもはず、レナ河の海に注ぐ處、氷の山に身を休めて、リリーは遠く來りしと
 も思はざりき。

凡そ戀に狂はん者、人の世の南の極より北の極まで、あらゆる愛の子にキスし盡さ
 ん程の勇氣は抱かざるべからず、リリー右手の手に葡萄の酒の杯をさしげ、左の手に
 薔薇の花束を持ちて、花の衣を舞踏の場にひるがへし、頃より、しか思ひぬ、今、
 杯こそ持たね、花の衣こそつけね、南の島より北の海に軽く翔りて、多くの神は
 リリーの耳に愛をささやけり、リリーはここに身をはてんと懐ひぬ、清き清き氷の
 山の上に。

餘りに高からぬ氷の山はリリーを載せて靜に浮べり、極めて高さ斷崖の上より山な
 すなだれの氷の山に崩れかかること屢、山の根は氷に深けれど、海はなほ深く、連

りたるままの氷の山は自ら漂はされて、小さき二つは一つになり、一つは更に他
 の一つになりぬ。

東の大陸と、西の大陸と、つながれんとして僅に別れたる瀬戸の流れに誘はれて、
 一つの氷山は廣き海に漂ひ出てたり、朝日の光、夕日の光、前より後ろに、右より
 左に、みどり、紫、黄、くれなる、射透す光りの中に、冷かに眠れる如きリリーの
 姿は閉ぢられたり。

漂ふまゝに潮の風はあたゝかになりぬ、八百重の波に解くるとなく、小さく小さく
 なりて、氷の山もリリーの姿も、とこしなへに消え失せたり。

若葉の家

干物多き梅雨晴に
水、入れかへむ百合の花
昨宵、鼠のいたづらに
荅一つを盗まれぬ

早う起きたる朝の間に
お伽噺をつゞらんと
紙に向へばすらくと
筆の運びも重からず

少し頭腦の疲るゝに
折柄遂どきゝなれぬ
風琴の音の洩れ来る
興あることゝ立出でゝ

裏へ廻れば垣越の
空家は既にふさがりて
上手ともなき風琴の
主人は女、影見せず

栗は漸く花落ちて
泥に虫づく杏の實

夏は來れり吾家も
青葉若葉に包まれて

いざ一息に續けんと
机の前に歸り來て
見れば事あり原稿の
文字は朱筆に塗られたり

いね子、都の生れにて
父がうちきさの血を承けず
したり貌なる墨の手に
母が油斷を責るのみ

筆持つすべは教へねど
自然と吾に見ならひて
物書く真似をよろこべる
此子の將來は神に任さむ

吾行く道

吾行く道のなぞかくさびしきや、草生ひず、水流れず、杜なく、丘見えず、晝か、夜か、更にわきまへず、只いづこともなくさす薄き光りに、あるかなさかの吾影を辿る、逢ふ人は皆口を閉ぢ瞳を動かさず、偶々物問へば、さなり、さならずと應ふるのみ。

吾行く道のなぞかくさびしきや、戀を追ひて古里をぬけ出てたる若き人を諫めしは吾誤りなりしか、もたえし人、玉の如き足に朝の露をはらひて跡くらませし道ならば、いかに匂よき花や咲きけむ、糸の如き流れだにありて吾を導かば、綿の如き一ひらの雲だにありて吾をいざなはば、燈火持たて鑛堀る山をくぐるが如く、柩を送る枯野の如き、さびしき懐ひはなかるらむ、只うつむきて定められし狭き一筋の道を、小石に躓かず荆棘にもつれじとのみ吾は行くなり。

うれひを載せて流れゆく河のほとり、いかりの火に燃ゆる山のいたゞき、今の吾には敢ていとはじ、烟は遂に空に消ゆべく、河は注ぎて海に入らむ、戀の物語に榮せざりし吾は、彼の詩中を歩むが如き、あたゝかき風にはふれて、知らずく低き暗さに従ふなり。

吾爲にさびしき道を教へたる神をうらむ、ボオ河のほとりに生れたるよき人は、清き罪を地極の府に責められたり、さりながら彼女の歩みし道はさびしからざりき、天魔の使、よし吾を硫黄にむせぶ谷底に引入るゝとも、吾爲にさびしからずして短き道を教へよ、吾こゝにいはんか、石冷かなり、はた、はてなくさびしきに何を望みて右手をかざさむ。

鞭れしものにあらずんば、鳥の羽の柔さを知らざらん、何者も吾をいためず、何者も吾を慰めず、あゝ吾袖裂くるとも薔薇の園に入らんを、主、起きて吾を追ふとも葡萄の一ふさを盗まんに、誰ぞ吾爲に垣を結ばざる。

君よ試みに想ひたまへ、天に仰がん光なく、人に求めん言の葉なく、小爪に通ふ血の色はかれて、踏むに音なき土の上を、紙に引きたる罪の上を歩むが如く、尺に測られてゆく吾懐ひのさびしさを、又想ひたまへ、かくて吾の、風の吹捲く真砂にも埋れず、美しき花園にも迷ひ入らで、はてのはてなる暗き壁に倚らん時のさびしさを。

舞少女

白女の尊神さびて
舞はしなよく手ぶりしを
薔薇さす世の花かづら
誰の頭にいたゞかむ

さす手ひく手は若草の
靡くが如くなよらかに
さつと流るゝ紅のの
舞は少女に始まれり

工匠凝らし、神像の
刹那の息に活ける如
吾を忘れし一さしに
眼の配りうつゝなき

疾しや踵は地に着かず
空に浮びて燕の
飛ぶか翻るかひらめくか
あらず、舞姫しづかなり

樂の嘶子は閑に
花となり又蝶となる

魂のゆらぎのゆらぐまゝに
にほひ一堂にみち渡る

廢城

あざけり給ふな、まこと己れは其人の素性聞くまでは此地を去らじと、三日の間を仇に過しつ、聞くまではえやみに襲はれたるが如く、はた戀に酔へりし如かりき。月の夜、例の櫓の下をさまよひ行くに、必ず二人の顔は相並びて吾瞳に映りき。右なるが若しと思へば、左なるがさだ過ぎし如く、次の夜左なるが姉ならんと思れば右なるがいとねびたり。物言ふを厭ひたまひて怒りに隠れたまふ神ありときけりしが、此二人の子も、梢の風さびしき城のほとりに、人聲の聞ゆる夜は、ふつと姿を見せざりき。さる夜は必ず蹄の音の響を聞く。時に遠く、時に近く、こだまのみして、駒の主人の影は遂に見るを得ざりき。吾がごとく城の邊りをさまよひて、美しき子現れざるを本意なく思ひ、手綱の紐のゆるみがちなるにやあらむ。想ふ昔、戦ひ負けて傷を負ひし猛者、息絶えぬる家の子の、前に後ろに折重なりて

斃れしを、神は愍みて、夕静かに下り給ひ、白き裳裾を地に曳き給へば、物の具したる猛者のことごとく、みそらに蘇生りて永久の平和に休みしを。あゝ野に戦ふ者は禍なる哉、勝ちたる人の砦は残れど、城寂として松風さむく、蔦かづら石垣に這ひ纏ひ、濠の水涸れたり。

迷はゞ兵どもの夢の跡なるべきを、はかよわき女の二人まで、古城の壁に吾を覗ふとは、旅の物語として、奇に過ぎたり、それ戀は危きに活く、他の戀ならば、吾安りに妨げねど、吾が上にしもかゝはれるを、知らで行きしとならば本意なけむ。さりながら、若し聲掛くれば二人は消えむ。

あやしき城にも守る人ありて、門の側に翁住まへり。問ふ、此城に人住めりや。曰く、住まず。否、女の顔を、しかも二人まで吾は見つるものを。物言はて行く人あらば確かに見む。吾も爾聞けり。翁よさらば人の住めるにあらずや。然り、或は住む人あらむ、城の内極めて廣ければ。嘗て此城に女ありしや。あり、双子の美しくし

さ姉妹ありき。

吾は潜かにうなづきて。

翁は窪みたる眼に怪しき光を放ちて、そはいと遠き昔の事なり。城の主、占ひ博士を召して、彼の二人の子の行末を占はせつるに、子達はすこやかに生ひ立ちたまはむ、されど戀知る頃とならば、危うき事の湧出でむさがあり、かまへて城の外に出し給ふな、吾が言ふ事は只是のみにと、博士は退きぬ。城は落ちぬ、主は滅びたり。遂に二人の姫君は城の外に出て給ふを見し者あらず、今も籠れりや、はた非ずや、吾が知る處にあらず。宵々毎に駒の蹄の聞ゆるは、父なる君の子等が戀を護りたまふにやあらむ。幾春秋をながらへて。噫、吾も老いし哉と髯かいなでて城の方を打見やり、壁の崩れに眼を注ぐ。

吾が酔は醒めぬ、よき家土産をもたらしして吾は此地を去るべきぞ。劍影霜と凝りし幾世の夢は消え去りて、戀は面影肖たる二人の少女に残るべく、星輝いて城高し。

只吾の言ふべきは、此の邊りを過ぎん者の忘れても聲は出すまじきにこそ。

こひごもり

戀ごもり籠りて居れば
 春の風眉にこそ吹け
 佐保姫の使はきたり
 扇の手しなやかならむ
 わが魂はものに浮れて
 小袖幕のかげにや入らむ
 わが胸の鼓のしめ緒
 自からゆるぶにまかす

冬ごもり火桶になれて
 かた糸のむすぼゝれたる
 みづ垣の久しき戀も
 春の香にうつろひてゆけ
 巢ごもりの鳥の眠りも
 さむるべき朝はありけり
 瑠璃鳥の聲の清きは
 雲戀ひて遠ければなり
 九つのみ天の笛に
 紫のいき吹きいれて

野は春の光となれり
吾こひのかくれ家出てむ

天香山

二人の男、一人の未通女を戀ひけり、未通女は畝火の里に住みぬ、穂向のよれる片
よりにのみ靡かんは罪深き業ならしと、小さき胸におもひ餘りてこの國をいなんと
懐へり。

山なき國へかも行かむ、見をさめの山ぞと月を追うて知らずく天の香具山の露に
登りぬ、腰休めんと萩の花をかきのくれば白き露はらくくと石の上にてほれぬ、冷
かなる夜なり。裙長く曳き渡りて峰の形するどからねど、大和國原を一目に見わた
して、生駒葛城にこそ狭霧こめたれ、右に耳成左に畝火、神代に据ゑし山の姿の、
ゆるぎもなさて眠れる影もみゆ、麓に近き里の火は隠れたれど、吾家の田には月照
れり、未通女はそゞろに涙ぐみぬ。
女神、一むら咲ける月見草の中より現れたり、世に恐るべきこと知らぬ未通女なれ

ばつゆも騒がざりき、又一しきり草に鳴く松虫の音ぞまざれざる。
 かきけづれよとの心を得させて、玉の小櫛を未通女に渡し、女神はさらに月に背さ
 て耳成山の方をそと手招ぎしたまふ、かきあぐれば鬢の毛のつやゝかさ、ふしめに
 なりて物にはぢらふ未通女のふりを、言葉こそかけたまはね、女神はいとしと見や
 りたまへり。

影の如き姿の星をかすめて近づくとみるまに、忽ち真榊の木の下に立たしゝは耳
 成山の男神なり、端然として袖かき合せ、此夜の様をいぶかしみ給はぬは未通女の
 胸をとくよりさととりてや在しけむ。

むかし吾を戀ひて畝火と耳成とあらそひし時、男神は吾に女郎花を贈り、耳成は吾
 に月見草を贈りたり、風にも露にもすすくと伸びて、思なげなる女郎花より、秋
 の日の薄き光にすら、しほみがちなる月見草をかなしとみて吾は耳成によりぬ、あ
 はれこの花、背戸の垣根に挿し置かば明日の朝にはしほみはてむ、かなしと訪ひ來

なば其人にこそよるべきぞ、妻あらそふは神代よりのためしなるに、何をなやみて
 からまし國大和をいなん、埴安の池は埋れて田となれども、藤原の宮居は跡消えて
 落葉つもれど、吾等の戀はなほ若かり、さ思さずやとみ聲ほがらかに女神のふりか
 へりたまへば、男神は尙端然として、真榊の下にぞ立ちたまへる。

未通女は月見草の花を抱いて山を下らんとす、月は未通女を送らんとす、とりよる
 ふ天の香具山を圍む山また山、今宵も遠く静かに守るらむ。

暗き谷

小さく暗き窓の下に
 肩幅狭う育てられて
 たま／＼人の世に出てゝも
 巷の陰に隠るゝのみ

さいなまれ、はた鞭たれて
 心に傷のたえまあらず
 うなだれてのみ伏目がちに
 晴れたる空は仰かざりき

壯士ながら少女さびして
 寐床の上に物をおもふ
 あかるさに忌み強きに怖ぢ
 夢にも笑は上らざりき

抵抗の理は辿りながら
 只冷かに口をつぐみ
 先づ其人の面を見て
 物言ふすべを教へられぬ

自然の前にも盲なれば
 頭にかゞやく星もあらじ

行かんとすれば人に逐はれ
逐はれて谷にすべり入るらむ

濱名湖物語

や、深山の小つらら、や、くれく小葛

街道下る早歌唄ひの男、橋本の長が許の女に戀して、濱名の橋をとろくと踏な
らし、東に渡るべき日を忘れたり。

女、髻を剃れよと言へば、髻剃りぬ、女、早歌唄へよと言へば、早歌唄ひぬ。松吹
き渡る汐見坂の浦風に袖をかざして、七十五里の荒灘を見渡し、好き島を見出した
まはずやと言へるに、男暮る、迄海の上を眺めぬ。白き鳥翼を張りて沖の方香かに
飛去れるを見しのみと告げし時、女ほゝゑみて其肩に身を凭せ、暫らく東路に行く
を止まり給へと固く約しぬ、かくて女は長の許に、男は女の兄の家に飯れり、兄は
笠縫を業とせり。

橋本の長に養はれつゝ、怖ろしき者と思ひ、哀しき者と思ひなぐさまるゝ者と思ひ

しは疇昔なりき。女は世にあはれなる男あることを知りぬ、さかしげなる人にのみ
折りし膝は愚かに似たる早歌唄ひの前に容易く崩れたり。人なき折のしどけなさは
賢き者の常なりき、人の前に愚なる男よ、彼は袂深く温かなる玉を秘めたり、そと
觸れても國を違へしごと嬉しかるを。

約せしを忘れ給はずは、此を被りて東に行きたまはずや、大磯小磯共にこそと男は
手に市女笠を携へたり。兄のしつらひし笠を君の手して被らせたまはゞ、吾隠れ家
はさむからず、いざ卒て行き給へ、そこに吾等の故郷あらむ。

急げば濱松ざんざの聲に咎められて、胸騒ぎする後ろより、戀の關守はいましめ
の繩を投げぬ。もろきは鴛鴦の思羽なり、捉ふる者や、その柔かなるに心おくれ
行方青雲の遠に放たんと爲しぬ、さりながら二人は美しく眠れり、幼子の手に握ら
れたる胡蝶の如く。

棚無小舟に戀のなきがらを乗せて漕出でしが、波荒れて柁を奪ひぬ。

波はなほ荒れぬ。渚は崩れ橋は落ちて、湖の口は海と一つになれり。

海は想へらく、湖は冷かならんと、湖は想へらく、海は騒ぐのみと、戀は海と湖を
通はせて、あたゝかなる潮を湧かしむ。

若き旅人よ、五十三次戀を唄うてゆき、する馬士の手綱をしばしひかえ、遠つあふ
み引佐細江の入江にかけて、活きたる戀の姿を見よ。波は梢を洗ふ松原越しに、磯
を端縫ふ水禽の繪は、その世の匠か、今の夢か。

幹みきに刻きざめる

ナイフの痕あとの消きえもせて
君きみが呼よ名なのかしら字じを
幹みきに刻きざめる常盤とこ木ぎは
空そら隠かくすまでしげりけり

樹こ蔭かげに來きては肩かたや手ての
白しろき粉こなはらふ小男こをとこの
癖くせや舉動そぶりも其そのまゝに
粉こな挽ひの小舎こやも残のこりけり

男をとこなりせば遂つひに又また
同おなじ樹こ蔭かげははなれじを
其その名なの君きみは行ゆく春はるの
うしろ影かげだにとゞめざる

笛物語

老いたる船頭は船中をみまはしながら、乗台の衆に少し聞く事ありと、汐風にさらされて銅の如くなれる頑丈の面に、一種不安の色を浮べぬ。乗合は孰れも船頭の語に耳傾けたり。此中にて樂器を持ちたまふ人あらば、疾く沖の御前に捧げ給へ、さらずば此船は動かすならむ、と云ひつつ、舳の方に胡坐を組みぬ。火の燃ゆると云ふ筑紫の海、あやしきことや多からむ。

乗合の人々は何事の起りしか解けず。漸く若き水夫の説明に依りて其由来を聞き得たり。語る處に據れば此般路の前に一つの小島あり、俗に沖の御前と云ひ、人住ふ島にあらねど、荒祠ありて昔より鼓の神様なりと言ひ傳へぬ。然るに、船この島の前を過る時、若し船中に、笛にても、鼓にても、はた箏にせよ、琵琶にせよ、樂器を載せてあれば必ず障害ありて進むべからず。されば此海を通ふ船人等は恐れ忌み

て、何の樂器にても船にあれば必ず海に投げて神慮を慰め、船路のやすからむを祈る習ひあり。之れ鼓の神は一に音樂の神にして、樂器を惜ませ給ふ故なりと、由来を述ぶるにもつつましく、眞に神を恐るる風なり。海を渡る者の神を恐るるは所以あり、雲を仰ぐにも風を待つにも、一に神の力を祈るのみ。されば彼等は一つの島の名なき神をも恐るるなり。船人等は相顧みて一言をも發せず。

背には旅苞を負ひて、隅の方にうづくまれる一少年ありき。初めより船人の語に耳傾けて居たりしが、立上りて吾は笛を持てりと云ふ。人々は皆其少年の貌をみつめぬ。少年は稍激したるらしく、頬に紅を潮して、さりながら吾は此笛を海に投入れる事は思ひもよらず、親よりゆづられたる極めて大切の品なりと言放ちぬ。年も若く世熟れぬ容子を見て取りし老船頭は、諭すが如く、怒るが如く、若き人、君獨りの船にはあらず、不運なりと諦めたまへと斷案を下す。乗合も少年をいたはらず

して、連に投げよと勸む。彼等には何の信仰もなく、勇氣もなし、只恐るるのみ、
 忌むのみ。少年若し笛を投げずば、今にも風波高まり、船沈まんかの如く、騷立ち
 て罵り合へり。かよわき少年のいかでか敵するを得む。

少年はまだ若き心にもつやくうべなう節なしと思へり、神が樂器を惜むは愛する
 故か、憎む故か、愛惜の餘りとすれば、其樂器を名手に授けて、神人の恩樂に聞か
 んところは思へ。はて知らぬ八百の潮路に投入れよとは云ふまじきに。想ふに神は
 人を試さんとするか、其人にあらずして徒に貴き樂器を抱く似而非樂人を誡めんと
 するなめり。眞に樂の秘奥に達し、假令ば横笛にせよ、一節切にせよ、神も感じ人
 も動ずる程の名手とならば、など其笛を水泡に流しやれとは云ふべき。よし／＼吾
 笛、天下の名笛と云ふにあらねど、此處に精神をこめて吹鳴らさんに、感動せしめ
 ぬ事やはあると、少年は歌口を濡さんとせしが。
 いや待てしばし、己れ今血氣にはやるとも、深く斯道の蘊奥を極めしと云ふに在ら

ず、修業の爲めこれより都に上らんとする身、神は其志を嘉みすべきも、未熟の
 音は聞きたまはじ、なまじひ口はばたき事を云ひて、船動かざらば如何にせむ、後
 世の笑柄となりて、遂に吾は樂の道にもたづさはるを得ざるべし、音は天地のもの
 なり、笛は人のものなり、さなりと自覺して海に投げたる重代の笛は、波のまにま
 に流れ去りぬ。

船は港に着きぬ、心は都に急がるれど、先づ丘の上に腰を休め、松原越しに吾來し
 方の海を眺めぬ。海は夕和の静かにして、磯に寄する波の響もゆるやかに、萬象眠
 らんとする聲に似たり。昔魚山の岸の波濤の聲に、新しく成りつと云ふ歌の節は知
 らねど、彼は只大なる天地の聲に觸れて、律と云ひ呂と云ふも、自然に外ならざる
 を覺れり。鳳凰の聲は形と共に笙に傳はり、二笛と云ふも、蘆の一節に象りて、其音
 を吹ならはせしにやあらむ、舞に迦陵頻の舞あり、曲に流泉啄木の曲あり、實にや
 樂は自然に出て、自然に歸る。吾息の笛に籠る時、思邪無きは天地と冥合すれば

なり。此機微を覺らずんば、千變の譜、萬化の調あるも、徒らに人間の聲となりて了らむ。然り、吾は歌よむ人の情と、繪筆執る人の用意を以て、自然の聲を味はむ先づ吾、自然の樂を養ひて後にこそ師をも求むれ、さのみ都に急ぐ事かはと旅の心を新たにせり。

斯くて彼はながき旅をつゞけぬ。霧にうづまく夕の鐘の餘音、山家に糸繰る老婦の歌、野川の水のせゝらぎ。木綿取る河内少女の歌の聲、野には野の聲、里には里の節をたづねて、幾年の修業か重なりゆけば、山に入つて自ら鼓の調を得、森にいねて草分の風に笛の律呂をさとする事も珍しからず。今こそは其道の師に就かめと、都に上れば、樂の道は衰へたれど、流石に樂器の祖といはるゝ笛の名手には乏しからず、秘曲と云ふ秘曲もまなび得、今は一流の伶人を以て天下に許さるるに到りぬ。なほ彼は若かりし時、筑紫の海にて笛を投げし事は忘れざりき。暇もあらばと思ひ居たりしが、好き折ありて便船せり。彼の海を渡る時、沖の御前は此邊にやありけ

むと船人に問へば。さなりと答ふ。折しも月明き夜なりしかば、舳に立出て、苦の露に歌口をしめし、心をこめて吹きならしぬ。まことや梁の塵を動かし、行く雲を停むると云ひけむ、古きためしと思はれて、そぞろに涙さをほるゝばかり、船人も感に堪へず聞きほるゝうちに、島は遠くあとになりて、海は静かなること疊の上の如し。

樂器を投げざれば船動かずなると云ふ傳説は、今になほ残れりやと問ふに、水夫はいぶかしき顔して、さる事は少しも知らずと云ふ。僅の年數なれど、昔はなほ人のこゝろも素朴なりけるよと、髪白き樂人は坐ろに懷舊の情に堪へざりしが、それも今は昔話となりぬ。

幼なき富士

天地の愛や凝りにけん
朝、産聲をそらに擧げ
みづほの島の姫みこは
吾世を高く占め給ふ

裳裾ゆたけく地にしきて
邦する者を許したり
春は耕す賤の夫が
その鋤の柄も清からむ

星のみくらに近く寐て
母の女神の乳房吸ふ
夜の御聲を羽にのせて
田鶴こそ松に舞ひくだれ

雲の襷をあやどりて
月をまりつく戯れの
まな子のふりを見そなはす
父のみ神のみことのり

姫よかまへて虫這へる
彼等を近く呼びなせそ

見よや閻浮にみちわたる
塵は彼等の吐息なり

争ひの火はつねに燃え
教への水は毒を盛る
川流るれば血を注ぎ
林しげれば斧を研ぐ

地の禍ひに堪へかねて
登る彼等をむかへなば
高さを知らぬあし音に
幼なき姫をさずつけむ

藐姑射の山のいたゞきに
太古の雪をむすびきて
をのこに似たる初冠
汝がおひささを戒めむ

若きゑまひの清見瀉
うつす鏡に身をはちて
世づまかぬ姫よなまじひに
野に立つ者を慕はざれ

塵吹く風の上に立ち

姿くづさず眉ねびて
雪のかむりをぬがん時
初めてゆるせ人の子を

廢屋

風に物を吹去る力あり、日に物を焼く力あり、水に物を腐らす力あり、天の力、地の力を以てすれば、何物か滅びざらむ。人の築きし城も、時の力は能く是を草に埋みぬ、萬僧の供養に成りし堂塔伽藍も、繪壁の崩るゝ如く壞れ去んぬ。況してや人間が假の住居の、風にゆらぎ雨に朽つるは怪むに足らず。

立枯の樹は樵夫是を薪にこれど、猶ほ切株を存す、朽ちたる船は船匠能く是を解いて、風流の材を造る、家焼けて翌春の草青く、山門、影無くして礎の苔に昔を偲ぶ是等は倒れしもの壞れしもの、跡ありて、跡の清きものなり、單り此廢屋、風打雨淋の爲すがまゝに任せて、腐れし體を永く地上に止るは何故ぞ、吾怪疑の眼を凝らせしも此所以なり。

見よ、此廢屋の比喻ば散り際さよからぬ花の、色變り香失せ、姿くづれても尚ほ枝

に残れるが如き様を。萱の屋根は殆んど吹去られ朽ち抜けて、青天井の下に納戸と
 覺しき所あり、勝手にまがひなき所あり、座敷と見ゆる室は畳十枚を敷くに足るべ
 く、未だ残れる畳に雨も月も洩らば洩れ、踏めば濕氣の水や湛へむ。床の間の壁も
 柱も新しきに、骨のみなる襖には、蜘蛛の圍の工を誇れり。壁落ちて支ゆるものな
 き鴨居の、今にも落んさまなる、根は蠹みて礎石に要なき柱の、觸れば倒れんとす
 る、床板は剝れて簀の上のあらはなる、屋根なき天井の弓形に曲りたる、棟と云は
 ず、梁と云はず、折れるがまゝ、腐るがまゝに任せて、人は是に觸るれば祟あるに似
 たり。

庭と思しき所は土をかへして一草を止めず、背戸の側には只山吹の時を得貌に咲き
 ほこれるのみ。素より藪と樹立に隔てられし孤屋の、垣根もなく、境界もなく、吾
 は植木屋の植込よりまぎれ入りて思はず此廢屋を發見したるなり、此家に通ふ路は
 あれど、草繁りて人足を入れしとも思はれず。抑も此家は何者の住居にて、斯く荒

廢の手に委ぬるか、遺族はなきか、知音は絶えしか、疑問は遂に解くべからず、こ
 ゝに暫く此空想に耽るを許せ。

聯想は直ちに家庭の不和と云ふ事に移りぬ、都近き此家ながら人の別荘にもあらず
 分家にもあらず、必ず豪農の本家なりしなるべし。

姑、嫁、養子、乙娘、舅と皆水の如き冷かなる心を抱きて、物言へば必ず毒となり
 手を翻せば必ず非となる。畳の下に悪蛇の巢を隠せる如く、怠るものと、疑ふもの
 と、憤るものと、猜むものと、相衝き相もつれて、鋏の刃は錆び、竈は崩れ、隙を
 窺ふ病魔の手は主人を一に斃し、娘を活ながら死の淵に狂はしむ。斯くて若き者よ
 り世を早めて老いたるは残り、髪、銀針の如く、額、鬼の如き八十幾歳の老女獨り、
 逆縁の位牌に蜘蛛の巢からまかせて、何事か高く笑ふに、里人恐れて近づかず。一夜
 黒風、雨を吹いて、樹を揺り垣を倒せし朝、壁の下に呻吟く老女の聲を聞しものあ
 りと言へど定かならず、いつの程よりか人住まざるなりて、廢殘の家を忌むること

例へば野に晒されたる屍の如し。

焼かるゝは火に崇あればなり、倒さるゝは風に崇あればなり、家の朽ちゆくは人に崇あればなり。恐るべき哉、人の和を失へる、僅に一步、和樂の境を外れなば其家の礎石は遂にむしばみて、大家の朽廢は目前に在り。人と人となづかずならば、人と家と復なづかずならむ、夜はまどをせぬ燈火暗く、晝は背を向け合ひて淋しきこと枯野の如からば、如何に美しく飾られたる金屋鎔障も、其堯に罅入りて、棟木は一分づゝたるみゆかむ。彼の松の樹の枯るゝや、初め一葉二葉より黄み枯れて、枝に及ぼし幹に及ぼす、一つの語、一つの行ひにも、家を朽たす毒氣の籠らざらめや。

春意

何より動く心とも
知らねど春の來るをば
吾に吉き日の選ばれて
はからふ如く想はるゝ

常盤木、艶を失ひて
草は地上に凍りつき
とひには古き雨水の
落葉の爲にさゝへらる

人は吹雪に埋まりて
氷となりし北の山
汝に時の力あらば
春の岩戸を開かずや

端なく胸になみよする
春の早馬のつかひ路の
それかと仰ぐ方もなく
肅條として野は寒し

風は針さすささらさの
曉深くひんがしに

紫とくる色あらば
疑ひもなく春は來らむ

草 薊

親は草薊鎌を腰に挿し、子は籠を背に負へり、溪川に沿ひながらゆくらしる影、山路のけはしきは忘れたるが如し。

吾家を離れてよりまだ里心失せやらす、此の木曾の山を出て、も、前途は都と共に遠きに、旅は一歩づゝ弱き心を試す、まぎらさばやと草薊の親子に向ひ、いづこまで行くぞと問へば、お墓までと答へて、道をゆづる、吾れに急げとや、さらでもつまづさがちの上りなるを、お墓とは郷等が祖先の眠る處か、否、々、然らず、そこに見ゆる墓なりと云ふ、従ひゆけば成程、崖にさし出でたる山松のかげに草深き奥城あり、圍らすに鐵の柵を以てせず、彫むに輝く石を以てせず、さゝやかなる自然の表に字あり、「木曾何某の墓」と云ふ、たえて年月を止めず、一句の功蹟を傳へず、若し蘇苔之を封じ、山嵐之を倒さば、徒らに行く人の腰を休むるに過ぎざるを、親

と子とが相携へて是を掃はんと云ふは何の所縁のあるやらむ。

子は籠を下し、親は鎌を抜いて、はや生ひしげる夏草を薊り初めぬ、このまゝ聞き糺さて過ぎゆかんも何となう本意なく、いかに平氏榮えて源氏の胤は草に隠れ、源氏盛んにして平氏の族の波間に潜む世とは事變れば、包まず語れよ、何者の所縁ぞと、むつかしげなる吾貌を仰いで、親はほくそ笑み、包まんにも語らんにも吾等其所縁を知らざれば、まこと詮なき事なり、只いつの昔よりか、吾村に口碑ありて、月に一度は必ず此のみ墓を掃ひ清むる掟あり、されば月毎に村の人のかわるゝ來ては、草を薊り水を手向くるは此のみ墓に對するつとめなり、ありし世の事はこれを探るの要あらず、遂に吾村の何人も忘れはてしならむ、旅人深くなあやしみ給ひぞ、かく語りつゝ、薊りつゝ、且、我が子に命じつゝ。

あゝ、吾何の爲めに都に趣かんとして木曾を出づるぞ、楯と矢とをかなぐりすて、わずかに、歸るべきは死の洞なり、よし彼れは勝てりと美しき石に刻まれんも、そ

は死しの呪文じゆもんのみ、夏草なつぐさがくれ永とこしへの夢ゆめやすきことこの木會きそ何某なにがしに如しくべけんや。
親おやは苜かれよ、子こは束たばねよ、清きよふなりたる墓はかにこそ吾われは歸かへらめ。

手紙てがみの端はしに

暮くれ行ゆく春はるに氷こほりう賣うる
巷ちまたの人の伊達いたて浴衣ゆかた
ものゝ早はやさを呼よび聲こゑの
盛さかんなりしか或あるる夜よなり
眼めは輝かがやきにあこがれて
春野はるのを駈かける少女せうにょ氣きの
弓張ゆみはるまゝに引ひくまゝに
胸むねのゆるみはあらざりき

歸れと聞くに勢ぬけ
草のなえたる想して
飴うる笛の瘦村に
生れし家は古びたり

美しき繪を見し如く
都に在りし一年の
夢みる事もたえなくに
國の訛りとかへりけり

折々たまふ玉章の
都言葉は讀みながら

つきなく思ふ吾耳に
あやし、記憶やにぶりたる

冬の日影

霜の槍、地を劈きて、氷の楯、川に池に朝の威を誇る時、冷かなる鐵騎に跨りて冬は來れり。

冬は人間に向つて厳めしき審判を下さんとす、人は冬を怖れ、冬を傷みて、爐の陰に隠れたり、枯木空林、花匂はず、蝶舞はず、落葉のかさ／＼と鳴る、洵に春花秋葉の勤めを終へて地にはつるの聲なり。

あゝ寂しい哉、冬の色、この時、吾曹の頭に彼の平等無邊なる慰藉者なくば、自然は凍死し、人間は寒殺せられむ。彼の慰藉者とは何者ぞ、天に日あり、背を向けて椽側に踞まれば、溫氣、衣を徹して暖かなること春の如し。

冬の日影は弱者に對する同情なり、戀に敗れて血を失ひし若者の如く、凍りはてたる地の上に、一度柔かなる光線の廻り來れば、溫容君子の如く、生氣胸に充てり。

葉落ちて實赤き草の蔓、苔枯れて幹寒き梅の枝、牧場の枯芝に眠る牛、鎮守の石段に遊ぶ子等、捨てられし犬、轉べる毬、背戸に縮まれる三つ葉の芽、垣根にこぼる山茶花の花。傘張りて軒場に干す者、らをのすげかへに出る者、嬰兒の襦袢を濯ぐ者、厨に漬菜を揃ふる者、詩を作らんとする者、借金を返さんとする者、誰か大いなる慰藉を冬の日影に蒙らざる。

宜なる哉、お暖かてございませと云ふ感謝の聲は、人より人に、口より口に傳へられて、彼等は冬の美しくしき日を謳歌せり。

あたゝかなる冬の日影に浴し得ざる者は、只囚屋に呻吟する輩のみ、罪ありて慰藉なき者のみ、病める者も猶ほ臥床を其窓の下に移すを得ん、爐の陰に隠れたる者も現れ來らん、枯枝を焚きし者は火を消さん。

仰げよ、一年の雲の行方の速にして且正しきを、迷へるが如く、酔へるが如かりし春も、燃ゆるが如く、憤怒るが如かりし夏も、皆天の彼方に歸りぬ。懷ふべき時、

省みるべき時、戒むべき時は來れり。凜として冬は犯すべからず、唯柔かに暖なる
日影の下に、人は其平和を樂みつゝあるなり。

火性

己れ火性の生れにて
火を吹くことに妙あれど
妻は火鉢に鑊さして
火を消すことに巧みなり

耳もと近く摺パンの
まだ寝ざること幸なれ
家主が家の弓張を
灯しもあへず駈出す

友、能く文を論ずれど
火遁の術は如何あらむ
生命と頼む哲學を
二三部脇に挿むのみ

危うし、軒に火のついて
灰とならんを待つよりはと
餘所の垣根を飛越えて
書窓の竹を折挫ぐ

うしろに高く聲あつて
曲者ありと呼はるや

わが腰骨はしたゝかに
六尺棒に打たれたり

花と降る火の中にして
つらくこれをおもんみる
言ひとき得ずに倒れしは
誤られたる人なりと

詩人村

丘と杜とに都の空を隔て、竹三竿、幽靜なる境に數戸の村あり、家の構、庭のさ
ま、凡て同じやうに作りなし、壁は輝かず、門は高からずと雖も、山茶花の垣根、
篋の水、心憎き住居ぶりの如何なる隱者のかくれ家にかと思へば、井戸端に米とぐ
妻あり、乳母車に遊ぶ子あり、こゝも浮世なりけり、人呼んで詩人村と云ふ。
此村に住める人は皆理想的の生活を試みんとする詩人なりき、彼等は理想の家を築
き、理想の家庭を持ち、理想の生活を實現しつゝあるなり。
併しながら彼等も亦已むを得ず、ある者は教鞭をとりて、ある者は樂器を膝にして
ある者はペンを走らせて、一日の幾時間をはげしき世に接しつゝあり、神倦み、軀
疲れ、歸り來るは此の一村なりき、夕の禽の翼を收めて埒に歸るごと、人は黄昏の
聲に逐れてかへり來たる時に多くの安息と、大なる慰藉とをその家より得む、爾く

家の美しきに化せらるゝのみならず、自然に歸るも此時なり、雲を仰ぐも此夕なり、
流れのさゝやきを聞くも夕なり、あゝ人は都會を造り、神は田舎を造る、田舎の夕
は太古のしづけさに返る。

其の金曜日夕には詩人村の晚餐會あり、晚餐會とは云へ素より魚鳥の贅を食する
にはあらず、野のもの、海のもの、あさらけきを各の家よりうち集めて、自ら稱す
る平和詩人の宅に催すなり、女と女と語り、子と子と戯れ、詩人と詩人と喰ふ、洋
々春の如き宵に、音樂の聲はしばしば傳はるなり。

一村を擧げて一家の如く睦む、彼等も初めより部落を爲し、にはあらざりき、五百
里を遠しとせず、來りて此村の主人公の一人となりし田園詩人あり、巷に向へる窓
の下に連りて残るが如き、車馬の響を耳にして天下を罵りたる諷刺詩人あり、自然
主義に傾きしあり、穩かなるあり、はげしきあり、或は力量の上に於て、或は主義
の上に於て、或るは據る所に由りて、殆んど皆異りたる歩調をとりし詩人、否、潜

かに妬み、羨み、慕ひし彼等の各も、ある大なる動機に觸れて、こゝに其の一家の如き部落を爲しては、又何等の離も隔てざりき、此一村こそ詩人は如何にして生活すべきかと云ふ惑を簡短に説明するものなりき、然るに世は此簡短なる生活をさへ遂に是認せざりき。

一夜大いに野分吹き荒んで、薨飛んで、棟傾きて、平和詩人の家は殆ど倒れんとせり、花園は巨人の足に踏まれたるが如く、立樹は夜刃の爪に裂かれたるが如し、此朝詩人の息に憂色あり、そは自然の力に服したる故ならず、音なき野分の吹きすさめばなり。

何々會社とやらむ、何々製造所とやらむ、此の地をトして大工場を建てんとなり、地主は詩の價を知らず、こゝ一ヶ月の以内に立退き給へと迫る。

ゆがみたる柱を正し、落ちたる薨を拾はんは寧ろ迂なるべし、詩人は潔く此地を去らむとす。

天下の詩人僅に數人、而かも分離せり。

詩人村の名を世に歌はれたるも、僅に半歳に足らざりき、巷に入り野に歸れば、再びいつの日にか彼等は相會はむ。

天なる戀

それ二柱の大神
み矛をとらし浮橋の
上に立たし、初めより
天なる戀は神秘なり

國よりさきに戀ありて
戀は潮に香りけり
海の上にはもろくの
汚れしものは住まざりさ

今八十島の八十隈に
地の災ははびけれど
神の拭ひしわたつみは
清きみ空に連なれり

年立かへる朝ぼらけ
海の香高き磯に立ち
罪の衣の十襲
つちに重きを耻づる哉

沖遙かなる横雲の
彩の扉は開かれて

太古の海に映るとき
誰か天なる戀をほがざる

鶯のゆくへ

暮るゝに遅き春の夕を歌の集にも倦じ、讀餘れるを二つ三つ花もてる紅梅の細き枝に榮せし時、初めてさよ子のゆくへ知れざることを聞きぬ。
 さよ子は隣家の少女なり。鶯の聲に酔てしものは、人の香絶えし沙漠の旅の冷たき眞砂の上に眠るまも、何處ともなく優しき聲を聞かむ。一度さよ子のうつくしき聲を聞しもの、例へば國より國の旅商人も、境界の山を越ゆるまでは其聲に送られん。今朝鳥影の障子に映し、時も、母呼ぶ聲をききぬ。作男の午餐に歸りし頃にも、雞に餌を遣る聲をききぬ。弟とさしやきつゝ、いつもの蓮花草の花はなぜ泣くかと言ふ歌を教ゆる聲もききぬ。垣根越に姿見ざるは今日のみにしもあらず、いた庇書讀む軒にさよ子の聲の音づれざる日はなきに、いぶかしきは彼女の母が、今朝早くより行方知れずと騒げるなり、魔にやさらはれし、野にや迷ひしと、愛子のあととめ

てあくがれ出んとするを、兄や父や抑へ留めて、淵の堤、山の裾、雲雀立つ麥の葉
 がくれ迄も求めしに、影も見えずと云ふ、をぞや親心、駈り過して深山の奥に分入
 らんより、吾家の背戸の柳かげに眠れるさよ子を覺せ。彼のうつくしき聲して何處
 にかさまよひ行かむ。

伴ひ歸らんに必安かれと彼女の母をなだめて、庭傳ひ吾は枝折戸の外に立ちぬ。や
 り水の餘りはこゝを流れ、すゞしろの花水に落て蝶のこぼるゝに似たり、此水に沿
 うて小川に出づべく、小川に沿うて更に月讀橋の畔に出でむ、月讀橋の下行く水は
 流れくゝて大いなる都に出でむ、あゝ吾さよ子はいかにしつらむ。

羊よぶ牧場の笛に牛も手綱を人に任せ、粉挽小屋の水車は響を收めて軒の小禽の囀
 り忙し。霞は罩めたり、野は遠し、されどかのうつくしき聲は何處にか隠れむ、今
 にも聞え來んかと耳聳つれど、稻叢かげに夕菜摘む子の聲のみして、背戸の柳は空
 しく垂れたり。

母は清らなる姿によりて彼女を求め、見えざるも道理なり、吾はうつくしき聲をた
 どりて彼女を待つ、見えざるもよし聲よき鶯を育てたる春の神よ、聞ゆる所にまで
 吾をゆるせ。さらくゝと行く小川の末か、鳥の歸る杜の奥か。夕の色は姿こそ包め、
 清らなる聲は野の末、山のはてにも響くらむ、さとさを誇る吾耳に、など其聲のき
 こえざるべし。

月讀橋の袂に立ちて空を仰げば、囀る雲雀も稀になりて、よろづの聲は收まらんと
 するに、野よりも山よりもかのうつくしき聲をかへさず、さて歸る子か、歸らぬ子
 か、惑をのせて幾度かゆきかへる橋の上より、川上遠く山の影さへうすれゆく。

彼のかくや姫ならねど、姿、聲のよきものは籠にやしなはる、彼女もはた歌の御神
 の膝近く召されけむ、人の世の歌はそのひゞき低く、そのふし濁れり、歌ふべく彼
 女の聲の清らに過ぐるを御神やいとほしと思しけむ。さらばさよ子は母こもる宿に
 歸らざるべし、吾いかにして呼び返さむ。

神はいかなる歌をかのうつくしき聲に歌はしむるぞ。添乳する母の如くやさしく、
戀人に物言ふ如く情愛ある、その聲は人の胸に酒と匂ひ花と香らむ。神はいかなる
うたを歌はしむるぞ。雲の通路遠けども、せめては吾に其一節をだにさかせよ、さ
らば吾、紙を持たず、筆も執らず、心の聲を歌にして其ひびきに和さんを、さよ子
の君よ吾詩にして歌ふべくは、疾く吾許に歸り來れ。

林檎

寒き衾をはなれたる
人は面の白うして
烟立ち添ふ朝井戸に
水汲みあぐる桔槔

若き下部を庭に牽て
鶏に餌をやる稻を干す
我家の秋もたけなはに
神は良き日を與へたり

起さよ我子等窓あけて
晴れたる空を仰ぎ見よ
小さきもろ手をさしのべて
小禽の聲をにぎらずや

朝食晚餐をたのしみて
團欒する子は雛鳩か
母は林檎を籠に盛り
軽く翼を抑へたる

愛の裳裾にまつはりて
林檎！と叫ぶ弟を

止むる姉も九つの
眼は木の實にぞ注ぎたる

草の實木の實育てたる
母が授けし味ひを
甘しと吸ふや幼子の
頬に嬉しさの溢れたる

雨夜の占

春雨しめやかに降る宵の程より、例の法師來りてざれ言いふ。今日は母上、姉上の外に、島之内の伯母上さへ見えたまへれば、法師はあたらしき賓客にも、何かな興あらせんと、たくむ顔つきのをかしげなる。

伯母上は姉上と坐を並べて在せど、ふしめがちにて、偶々物言ひ給ふ聲も力なげに。運氣、縁談、さては待人の來る來らぬ、まことに掌を指す如からんは、吾術の神なるところなり、ゆめ／＼疑ひ給ひそと、まがほに言出づるを、姉上のほくと打笑みて、あら、あやしき法師かな、加持、祈禱こそ其すべにもあらめ、今宵に限りて、易を見んとは心もとなし、よき程のこと云ひて、人をくろめんとするにやあらん、誰も信じ給ふなと誇り顔なり。法師、わざと打腹立ちし面もちして、こは聞えぬことを仰せらるゝよ、口はゞたきことは先づ試みたまひて後にこそと、空目使ひして、

疎らなる髻を捻りあげつ、やをら膝を伯母上の前に向けぬ。

何とかしたまひけん、伯母上の眼はあやしふかゞぬ。姉上は心づかず、ひたすら法師をうつけ扱ひにして、笑ひこけ給ふ。さて先づ賓客よりこそと、法師はなれなれしく其顔をみまもりつゝ、お年はと問ふ。

伯母上は二十一にて、酉の年なり。掌の筋など、とみかうみするうちにも法師は始終其顔に心とめて居たりしが、何をか思ひあたりけむ、腕こまぬきて、といきつくさま、たはわざとは思ひながらも、ゆゑ／＼しきに、吾も片唾をのみて靜かにひかえぬ。

雨の音の聞ゆるとはなけれど、前栽の木立、庇外れの葉蘭、雫を受くる音のたえ／＼に、ものしめやかなる夜なり。

法師、首を傾くことしばし、いかにしてもそは思止まり給へと、諫むる如き口ぶりにて、深き事情を問探らんは憚あらんも、吾占ふ處によれば、おもとは今、思迫

りし事あるかたちなり、まどへる哉。

胸をひらき給へ、海原の如く胸をひらきたまへ。黄みて後にこそ葉は落つれ、何事も天地自然の力に任せたまはゞ、惱みたまふこともあらじ。よしなきことを思ひつめずに、心をさらりと翻したまへと、ねもごろなる法師の詞は、吾には解さ難かりしも、母上のみは謹みてうべなひ給ふさまなり。姉上は眼をつぶらにして、けうとさふりにて在す。たゞ伯母上のさめくくと泣きくづれをれたまふをあやしとこそ思ひしか。

後に母上にきく、伯母上は島之内の婿君といさかひて、暫く吾家に歸りて居たまひしなりと。

詩人の家

南天の實はうなだれて

水仙姫は寒げなり

青葉杉垣ひまをあらみ

庭は外より透いて見ゆ

年新しく來れども

春咲く種子の覺束な

地に蒔かれたる内畑

すじなすじしる霜に伏す

都さかひを出たれど
若き主人が詩の名を
通りすがらにさゝやきて
ふりかへり行く小さき家

杯あげて詩の爲に
好き歳うたふまれ人の
一人二人に日は暮れて
繪葉書多く来るかな

他の娘をあづかりて
彈始強ふる爐のほとり

妻は密柑の露吸ひて
新しき詩は讀まざらむ

木の葉

故郷の友、一書を寄せて曰く、君と共に遊びし彼の小川のほとりなる小車小屋は將に壊されんとす。今に晴れたる空に煤烟を揚げて一大工場は起らむ。彼の銀杏の樹も袖の手にかゝりぬ、今日散歩の序、二人して挽く鋸の痕を見つゝ佇める折に、吾肩を打ちしは此一葉なり、封じて君に參らす、秋晴れたる日と。吾此いてふの一葉を得て何物かの感に打たれぬ。なべて草の葉と云はず、木の葉と云はず、形と色とに依りて植物の葉を愛するに至りしは吾此頃の事なり。八ツ手のあつかはしき、椿の葉のこちたげなる、柊の葉のとげくしき、芙蓉のたゞしき、葡萄の葉は詩人の胸に描かれ、南天の葉は絃の音を清うす。されば霜繁きあした、園丁が掃き集むる中の一葉二葉だに捨て難き折はあらむ。吾若し木葉帖を作らば、先づ友の送りしいてふ葉は其序にや代へむ。

眠らんとして

草より起る聲なりと
童子は燭を消して言ふ
地に音なうして葉の落る
秋は夜の間に来りけり

冴えゆく星と更闌けて
眼は内に開かるゝ
眠れ眠らぬおちつきの
底より動く心ありて

大和三山

かぐやまは、うねびをわしと、みみなしと、あびあらしひき、かみよより、かくなるらし、いにしへも、しかなれこそ、うつせみも、つまを、あらしうらしき

中大兄皇子

古、萬葉詩人の筆に依つて詩化された大和三山、乃ち天香具山、耳成山、畝火山の古事は播磨風土記に『出雲國阿菩大神、聞大和國畝火山耳梨三山相闘一以此歌一諫山、上來之時、到於此處、乃聞一闘止一覆二其所一乘之船一而坐、之故、號二神集之覆形一』とあるのが出所ださうで、以來此三山は如何に奈良朝歌人に多く歌はれたらう。衣ほすてふ天の香具山の歌は、柴刈る童も口すさむ處で、香具山とはどんな山か、畝火山とはどんな姿か、誰しも鳥渡知りたいてあらう。芳野を流れる芳野川を割して、それより以南は山岳重疊、十津川、大臺ヶ原の深山に連り、北は一體に拓けて所謂大和國原の王化に濕うた地である。三山は此の平原の間に孤聳して、畝火は西に、耳成は北に、香具山は東に、其距離各一里足らず、

三方に相對して鼎立して居る。畝火最も高く、耳成次ぎ、香具山は最も低うて丘のやう。或は昔の天香具山でないと云ふ説もあるが、地勢上何うしても此山を以て香具山とせざるを得ない。單に形を以て云へば耳成山が最も好い、畝火は嶮く、香具山はとりよるふとは詠まられてあるが、實際は山と見えない程で、要するに三山とも掌で覆はれるやうな小さい山ではあるが、詩人が千古の吟情を忍ぶと、坐ろ懐かしさに堪へ難い。此の如き平凡の山、平凡の水を詩化したる萬葉詩人に對しては、何んな平凡の山、平凡の水でも、好んで天下に紹介せねばならぬ。附て云ふ近者服部躬治君の説に據ると、右の中大兄皇子の歌に對する略解の註釋は非で、香具山と耳成山とは男性、畝火は女性であることを、文格上から論明せられた。如何にも爾説いた方が、詞格も明瞭になり、釋然として其意の存する處も了る。但だ實地に山の姿を見ると、畝火は最も男らしく、耳成は最も女らしい。香具山

は男とも女とも云へないが、只予の登つた頃には、盛んに男郎花が咲いて居たので同君の説に思ひ合せて、思はず微笑された。

みくなし山

耳成、耳梨、或は耳無とも書く、誤つて耳成と教へて居る小學教師などもあつた。俗には天神山と云ふ、十市高市の界、田野の間に孤立してあつて、登れば頂まで三町ほど、地質は火山岩、全山の小松は同じ丈に成長して、何處から見ても小さな富士の姿をしてゐる。何故小松ばかりで、鬱蒼たる樹木がないかと云ふに、明治の初め、此の山が官林になると云ふので、山の持主が皆伐倒して坊主山にしたからださうだか、可憐しい事をしたものだ、小松の丈が揃うてあるし、山の姿がまんまるいし、誠にみくなし山の名に背かない。中腹には山口神社と云ふ小さな祠があつて、それを守る老夫婦の住居が傍に在る。見はらしも鳥渡好い、歌には梶子山とも詠んであるが、梶子より躑躅が多い、だが一體に植物は乏しい方で、寧ろ秋は虫の音な

どに哀を催させる。

麓に涸れた池がある、これも萬葉に歌はれた耳無池、かつら見と呼ぶ少女が三人の男にいどまれて、終に身を投げたと云ふ、それであるか否かは歲月茫茫、温ぬるによしもないが、春は蓮華草、土筆、秋は紫苑、野萩など摘みに來る鄙の少女は今もなほ歌の趣であらう。

天香山

やまとには、むらやまあれど、とりよろう、あめのかぐやま、のぼりたち、くにみすれば、くにばらは、けぶりたちたつ、うなばらは、かまめたちたつ、うましくにぞ、あきつしま、やまとのくには。

大和では天香山と云ひ、伊豫では天山と云ふも、もとは一つの山であつたが、天降る時、二つに割れたのであるとは、伊豫風土記の傳説、古の歌人輩、頻りに神秘説を持って、凡そ此山は本朝の靈山として在所陰陽家に沙汰せらるゝ山也など、云つてあるが、所謂香山は此山に相違ない。前言ふ通り、山の形は極めて低く、平

かな丘のやうに見えて、あらはな山だ。萬葉考別記に、形は富士の山をちいさく作れる如くにて云々とあるは、全然間違ひ、或は耳成山と取ちがへたのではなからふかと思はれる。北の麓には、天香具山神社がある、南の麓、南浦と云ふ地には天ノ岩戸、湯笹などあつて、里人に聞くとお日様の誕生なされたのは此邊だと云ふ。天ノ岩戸と云ふ處には二抱へにもあまる樹の樹が二本あつて、一本は折れてある。祠は無残に荒廢し、湯笹と云ふも形ばかりで、少しも要領を得ない。山の上から見ると西の麓、木ノ本村と別所村との間に、鏡ほどな池がある、これが所謂埴安の池の名残であらうか、外には池らしい影もない、古のことは知らぬを吾見ても久しくなりぬ天のかぐ山(萬葉集)二千年のいにしへに、なほいにしへは知らずと云ふか、自然は悠久なる哉。

雲根火山

高いと云つても海拔六百二十七尺、併し山は岩石で疊まれてあるから爾一氣呵成に

は登られぬ。頂上には神功皇后を祠つた社があつて、陰曆七月の何日かには遠近の男女を徹して登山する風がある。山の尾は南に曳いて他山と連り、東北には神武天皇の御陵がある。畏くも武人の世には、神武田と字するのみで、雑草の間に埋れてあつたのが、明治の聖世に兆域を擴め、石の玉垣、白砂青松、億兆仰いて其莊嚴を拜するやうになつた。

御陵より南には檀原神宮、更に南には久米寺がある。これは久米の仙人が艶聞を流した舊蹟で、仙人堂など云ふのがある。

大和の山

三笠山とか三輪山とか歌枕のある山、初瀬山とか春日山とか神佛の在す山、それから名所の山岳は夥多しいが、別に探險的に登ると云へば先づ大臺ヶ原と十津川であらう。金剛山はかなり高く、且登山に便宜が多い、山上ヶ嶽は行者的探險に於て、近畿では誰知らぬ者はない、壯年の間に一度は登るべきものとしてある、恰も東京

の富士行者、御嶽上りと同じ事だ。夏になると錫杖を杖き、法螺の貝を吹立て、
 淨衣の行者幾群々、吉野の奥を指して行く者、皆之れ山上参り、役行者の古蹟と云
 ふので、半分は信仰も伴ふのである。大臺ヶ原に到つては、海拔六七千尺だが、殆
 んど人蹟を見ないと云ふ深山幽谷で、屢々隊を組んで探險を試みると云ふ噂もあつ
 たから、遠からず世に紹介せられるであらう。是等山としても探險するに價値はあ
 るのだが、今予が何等の材料も備へて居ないのは、太だ残念である。

夜の戸

天地の氣壓低うして
 風間を休む雲の吐息
 人蒸暑う夜の戸を
 細目に開けてうかゞへば
 聲あり空の遠くより
 來るが如く去る如く
 恐怖に充てる闇黒に
 胸悸きて内に入るかな

塔下の少女

胸裡の底に暗い蔭があつて、千年の歴史を包む平安の都も、自分には普通の山、普通の水としか映らないので、成るべく口さかしき縁起を聞かぬ寺か堂かを探りたいと、七條を南して東寺の境内を逍遙した時であつた。

群籍を涉獵つて調べ上げた名所圖繪やうのものには何とあるか、然るもの／＼しき事を知らうとは思はぬ、只此の東寺の塔の下に立つて、自分は初めて胸底の暗い蔭にも一掬の泉の、自分を慰めるものある事を知つた。

あらゆる事に失望しても、ゆくりなく詩情の湧く間は、自分の生命に微かな光がある、今は西に漂ふか東へ流れるか、身の處置に困つて心細い旅寐を重ねて居るが、此處へ來て慰藉られたやうに思ふのは、此寂寞を充分に味ひ得られるからであらうか。

頃は夏の末、秋風は朝夕、人を驚かすが殊に昨宵からの荒模様、塔の庇を走る雲は魔の相逐ふが如く、風、狂ひて押寄する時は、木の葉は地を舞上りて塔の屋根に重なり落ちて、四角に吊るされたる寶鐸は、憂然、響を爲して古銅、天に飛ばずやと怪まる。

此荒るゝ日に、森の中の塔の蔭に逍遙ふものは、恐らく自分一人であらう、然かも旅なる自分一人であらうと、立つくす處に、あやし樹間に、紅き衣見えて、行かざる人あり。

十二三の姉妹と見ゆる二人の女で、暴風に落つる小枝を拾ふのであつた。旅に出て、路問ふ外は此方から辭を掛けた事のない自分も、此少女には求めて近づいた。

何にすると言へば、薪にすると對へ、家はと問へば近しと許り、物怖ぢする眼に、我顔をさへ仰がぬ。おも／＼しき我態度は、益す少女に疑懼の念を増さしめ、姉妹は相促がして、早く去らん氣勢。自分は此少女を暫く此處に止めて置きたいと思ふ



が、扱て其辭を知らぬ、餘りに人に遠ざからうとして、愛すべきものにまで情が映らなくなつたのであらう。

少女は怪しき人に出會たと、歸つて母に告ぐるであらう。優しき返答を求め、慰藉られるやうな辭を多く聞かうと試みたのは何と云ふ得手勝手であらう、東寺の塔が意に入つたからとて、活きた少女まで意に入らしめやうとしたのは誤りであつた。

其邊に落ちてある小枝は拾はずに、少女は我傍を離れて行く、少し離れると又小枝を拾ひ出した、頓て其影も幹に隠れて了つた。自分は言知らず淋しさを覚え、此處を立去らうとふり仰ぐと、風一しきり、木の葉を捲上げて、塔の屋根に生へて居る木のやうな草は、ちぎれさうに亂れて居る。

軍人町

論語讀む子の聲止みて

宵の裏家も静まりぬ

軍人多き邸まち

殊に留守居の秋淋し

誰が衣をや染めかへて

砧擣つらむ槌の音

戸ざし、隙を灯の洩れて

月は紺屋を離れたり



朝餐 晩餐

何人も必ず繰返して居る毎日行事は朝晩、食事をするに云ふ事であらう、極めて平易な、普通な、理窟も面倒もない問題であつて、其實矢張一日も缺く事の出来ない問題で、食事をするに云ふ感情は、論文を読む感情ではないけれど、少くも三面記事を読む時以上の感情であらう。

食事をするに云ふ事に爾く意味を置過ても困るが、吾々が過來し方を顧みると、意味の無いやうな間にも、食卓に向つた時の感情、ある日ある時の感情は能く頭に印して居る。食事して居る時にはたゞうまいとかまづいと云ふだけの事であつても幾年の朝餐晩餐は吾々に何事をか教へ、また何事をか語つて居る。考へて見るとなか／＼面白い。

自分は前半生を田舎の小都會で生活したから初めて東京へ出た時には下宿生活を爲

し、それから東京で家を持つた。單に食事をするに云ふ事であるが、それが田舎と都會に大なる差別がある。自分等の育つた家では三度々必ず我家の飯を食ふものと定まつてあつて、餘所で食へると云ふ事は罪惡のやうであつた。田舎は素より菜食で、魚は月の一日十五日の外は食へないものとして居る、中等以上の生活を爲て居る家でもさうだ。況んや美味い物を食ふ爲に料理屋へ行くなど、云ふ事は全然無い、親族に慶賀があるとか、何かの會に招待されるときか云ふ場合だけ、御馳走をたらふく食へるので随つて土産の折詰の珍重される事普通でない。三度の御飯は必ずお膳で食へる、膳と云ふ者は實に封建的な者で、五六人乃至十人もある家族がズラリ膳の前に座つて飯を食ふ、主人公は主人公、細君は細君、下女は下女と其身分に従つてお菜や何かの盛分も材料も違ふ、御飯中は會話をしてはならぬと云ふので、飯を食ふ事頗る謹慎の體、言換れば興味索然、大體は砂を噛む如く食し終ると彼等は恐らく食事の趣味などは知るまい、只腹が一杯になれば箸を下す迄である。

其處へ行くと、ずつと田舎の山村裡の梅の花が背戸に咲いて居るやうな家の方が遙かに詩的食事を試みて居るので、彼等の労働が神聖なる如く、彼等の食味も純潔であつて、眞個に味を味ふ人であらう。

食卓で食事をすることは東京一般の風俗であるが、是は平民的でもあるし、又趣味もある。家族團欒して灯火の下に晚餐を共にするのは、一幅家庭平和の圖で、何時も何時も主人公が家人と共に食卓に向はないやうな不規則な家庭は餘り好ましくない御馳走の用意許り出来てあつて本尊は何時も餘處で食べて来るなどは、都會の人間に往々見る處で、又之を誇りとして居る人もあるやうだが、食事は出来るだけ一家團欒してなすべしである、どんなに感情を融和するであらう。

下宿屋時代の飯時分を思出すと實に淋しい、自分の或る友人は國から着いて直ぐ下宿を借りたが、飯時分になると厭世觀が起ると云つて、平素こぼして居た。それは至當な事で、食ふ物は違ふ、味のつけ方は違ふ、一人／＼別室に籠つて獨り飯食ふ

秋の暮では、悲しくなつて遊子郷を想ふ事更に切なるものがあらう。

下宿屋生活の反動でもあらうか、友人と食卓を共にすると云ふ事は至極愉快で、一度もいッしよに食事をした事の無い友人は、同じ友人でも猶ほ幾分の親しさを缺く。自分は必ずしも酒と叫ばぬ、晚餐を共にする、是だけで澤山、それも必ずしも御馳走を要しない、只平素の手料理で宜い、而て二三人心會ふ友と食卓を圍んで、食事が済んでから尾も頭もない浮世咄がはづむ時に於て、自分は一種の興味を感じる、食後の二三分は精神が最も平穩な時で、情緒のゆるんだ時であらう。

夏は若葉の頃の筍飯、秋は西風冷かなる頃の栗飯茸飯、時に應じての日本料理も亦風趣あるもので西洋では能く晚餐會をやるが日本のは晚餐會でなく晩酌會だ、飲むを主とすると食ふを主とすると其間に多少の相違がある、是で飲む方になると事稍や大業にもなり手数が掛るけれど、食事の方になると頗る輕便で細君の同情を得易い、自分は日本の家庭に於ても盛んに晚餐會の行はれんことを希望する一人である。

食すると云ふ事を或る一種の卑しい感情のやうに思ふのは誤謬であつて、人間に食すると云ふ事程、自然の情はあるまい、戀愛も或る程度迄は美しく、それ以上は汚れたものとなる如く、食欲も或る程度迄は最も純なものであらう。絶對的に食事を賤み、慾情を抑制しやうとするのは不自然である、味の幸を無みするのである。あゝ朝餐晚餐、吾々は多く是を意味無く繰返して居るものゝ、何んな感情を此間に養つて來たであらう。淋しい味ひか、楽しい味ひか、つらひ味ひか、高尚な味ひか其食事の品の變る如く、人に依つて變るであらう。試みに或る時或る家の晚餐を窺つたならば、如何に人世の小さい影が見られるであらうか。

昔の戀

戀、人の子を若うすれど
 人、とこしへに若からず
 秋さる衣の冷たさに
 昔のこひを憶ふ哉

燃えてまばゆく美しく
 色炬火の木に草に
 映りし影はあともなく
 空の緑とかへりけり

夕暮日記

十五日。梅の實をかり落して袂に入れたる金ちやんは、母に叱られて通りへ遊びに出たり、向ふの草屋根の上を烟しづかに這ふ、金ちやんの姉の夕餐を炊かんとするなり。

物言はて臥したまへる祖母上に白粥をすゝむ、二口啜りしのみにて、あたり暗ければ早く燈火を點けよと曰ふ、ランプを極めてあかるくして枕頭に置く。さりながら眼は開きたまはず鼻の上額のあたりなどに汗流るゝほどなり、拭てまゐらすれど又出づ、苦しさにやと問へば少しく苦しと應へ給ふ、床に就きてより未だ四五日しかたゝねど、老の身の弱り易く、今は身動きすら心のまゝならず見ゆ、汗したまふはよろしからじと思ひ、車夫を呼びて醫を迎へ來らしむ、其間に又寒くなりしとて布團を被りたまふ、其まゝ一言もなくすやゝと睡り給ふ如けれど、其手足の極めて

冷かに、爪の色の常ならずあやしさに、胸騒がれてとく醫師の來れかしと只そのみぞ待たるゝ。

十六日。笙歌遙聞孤雲上、聖衆來迎落日前、川を渡り林を抜け、麥圃の間を幾曲りして、輿を昇く男の脚早けれど、夕陽丘に落つること遅うして、柩のせたる輿に影薄し、逝ける者は老たるなり、送る者は若さなり、人間の命運、萬有の極致、傷まずして、迷はずして、一路自ら落合村の火葬場に到る。

七十幾年——半夜の烟、あゝ傷まざらむか、迷はざらむか、更に大に傷むべきものあらずや、更に大に迷ふべきものあらずや、殘夢月遠き馬上に眠りて、人世をさとり顔せしは弱き子よ、吾遂に悟るべからず、轉ずべからず、一意只「死」を疑ひて已まざるなり。

晝貌は白く萎み、黄に咲く花は名を知らず、野は暮れんとす、川狭く水深き江戸川の上流名なき橋を友と渡る、有縁無縁、幾千の人が死を送りて此橋を渡りつる、吾

は言はず、今こゝを渡れるは皆詩の友なり、風流の友なり、亡き人の友にあらず、否極めて縁故薄き諸子なり、而かも諸子は強て二里の遠きを來る、人生の知遇豫め知るべからず、芳魂とこしなへに返らざるを憾むのみ。

十七日。天聲君來る、亡き人の遺骨は何處に埋めてよろしきか、東京にせんか故山にせんか、所謂墳墓の國なれば古里にしたまへと同君云ふ、自分も素より其心なれど。

十八日。悔みに來りしす、しろのや君歸る、家人は用達に出たり、只一人椽側にはらばひながら、淡として水の如く光なき天を仰ぐ、無念無想の時、フト「幸三郎、そこら暗いがナ火をともしておくれ、幸三郎」と呼ぶ聲す、首を擡ぐれば薄暗き床の間の壁に映る土器の火影、机の上の遺骨の前なるみあかしなり、其聲は在すが如く、其姿の動くかと思はる、無常迅速線香の火の消えぬさきにと、立ちへて、又椽側にうづくまる、夕風さら／＼と軒の楓に音づれて、外は「忍ぶよろひ

の袖の上」と童のこゑにたそがれてゆく。

十九日。線香買はんと榎町に行く、四日の月ほそく、行く人に浴衣多し、俳趣を得て句ならず、求めし線香の泉州堺何某製とあり、期せずして百里外故郷の線香を焚く、亦多少の因縁。

二十日。床の間なる金盞花、下葉は殆ど枯れたれど、花の色濃なるにすてもやれず、右に寝返ることもむづかしくなりし病める人を此花慰めしと幾日ぞ、初め神樂坂の縁日に、僅か數錢を投じて買ひ、美しき鉢に植ゑたるなり、蘭、萬年青など價貴きをのみ好める人、如何に貴き報酬をか得たる。

二十一日。初七日なり、今日迄机の上に供物して朝に暮に拜したる邊骨も、假の菩提所に預けて讀經を乞ふことゝしたり、立て廻したる葭障子も除かれて、座敷は目に立ちて寂しくなりぬ、梅子落て栗の花咲く小雨の夕、世の波をかくに極めて強かりし人のうまごととして、吾や、うたに外れたる二十幾年の非を覺ると頻りなり

故郷の家

帛裂くひまも歌想ふ
あるじ心のよそなるに
礎 ゆらぐ古き家
棟いたづらに高きかな

精あり凡そ三抱えの
男松は終に枯れんとす
人の變るを草木の
先づいたむやと疑はる

うからやからに繋かれて
あらがひかねし幼氣も
こゝに一度矢放れて
生れし家はみかへらず

都の天は晴れやかに
居ながら雲も仰げれど
光さゝざる故里の
昔の家を夢に見るかな

終點まで

上野に或る會があつて、會散じてから五六人、同じ電車に乗つた、盛んに會の噂が出て車中、外に人なきが有様、笑ひ聲のどよめく中に電車は萬世橋畔に着いた。此處で下町へ行く者と兩國行に移るものと、山の手線と三方に別れて、自分等三人は青山行に乗變へた。

三人になると今迄のやうに對話がはづまない、話が止むと共に、各自の頭腦の中には、今日の會の盛んであつた事を思ひ浮べ、多くの人の顔、多くの人の語が、幻のやうに映る、電車は日比谷公園に止つた、此處で又、仲間の一人は、三田へ歸ると云ふので車を降りた。

兩個になると全く對話が無い、其人も亦三宅坂まで行けば、新宿行に乗換るので、今のうち何が話して置かうと思ひながら接觸が無くて、沈黙てるうちにもう三宅

坂。

獨になると今更のやうに淋しく感じる、隅の方に眠さうな眼をして窓に凭れて居る小僧の顔を見ても一向に面白くない、電燈の光輝がまばゆく眼を射る。夜遅く電車に乗る事は自分に取つて珍しい事でもなく、何時も初めから一人で乗るから、別に淋しさを感じない、今日は晝間、花やかな會に臨んだものだから、斯の如く淋しさを感ずるのであらう。

次に淋しさが一轉して、自分の家と云ふ事に想到した時、自分は今、青山行の電車に乗つて居るから、一刻づ、自分の家に近づきつゝあるのだと感じた。

所謂竹馬の友もあつた、小學校時代の友達もあつた、同窓の學友もあつた、職業の上から心やすい人もあつた。けれども萬世橋で別れ、日比谷で別れ、三宅坂で別れ、自分が乗換るか、他が乗換るか、つまり自分は一人で歸るので、僅か一時間の電車にも、人生の行路を示されたやうに思ひながら自分は青山終點で降りた。

落葉を焚く歌

秋晴の朝、庭守は
黄なる樺なる雌黄なる
木の葉草の葉うづだかく
火をうつさんとかゞまりぬ

夜にうるほひし露霜も
一葉くくに乾きゆく
烟のかげに立ち添ひて
葉守の神やあらはれむ

眞夏大野を覆ひたる
國つ鎮めの公孫樹
光に透いて金葉の
皆地に落つる響かな

櫻の精は遠春の
海を渡りて去にけり
朽ちては軽き乾き葉の
梢はなるゝ力かな

常盤なるべき檜葉杉葉
うらがれたるがめらくと

火になりやすき秋のはて
地の美はそらに收まらむ

機にかゝれる織絹の

自然の彩のまばゆきも

捲かるゝまゝに彼方なる

はてしなき手に渡されぬ

あゝ落つる葉に驚いて

烟を擧ぐる庭守よ

萬葉焚いて盡させざる

林に入らば悸かむ

狸囃子

東京と云へば天下の都會に相違ないが、丸の内に追剝の出さうな廣い草原があり、賑やかな大通の裏へ入ると、人住まぬ妖怪屋敷のある事も、亦東京が天下の都會たる事を證據立てるもので、敢て怪むに足らぬが單り狸囃子に到つては、東京に於て聞かうとは思はなかつた。

狸囃子の名所は牛込の奥を以て第一とす、早稲田と云ふも高田と云ふも孰れ都の町の名にあらず、新宿、大久保、千駄ヶ谷、澁谷の一帶にかけて、又狸囃子を聞くに妙なり。水鶏の里ある事は是を俳人に聞く狸囃子は都名所圖繪にも洩れた。

夏の夜は未だ宵ながら梟の聲を聞くも、山の手では珍しくない、狸囃子に季なし、春は鼓の如く、秋は柿賣る雜司ヶ谷の團扇太鼓に紛れる、或る時は里神樂の囃子を聞く如く、或る時は馬鹿囃子の稽古の如く、或る時は樽の底を叩く如く、或る時は



樂隊の如く、或る時は如何にも狸の腹を打つ如く、遠いかと思へば近く、近いかと思へば遠し。

枕に就いて夢成らず、太鼓の音が氣になつて頭を擡げ、二三寸、枕を離れて聴くと、其音冴えて面白さうな調べ、更に起つて是を聴くと、断ゆるが如く、續くが如く、響あれども物に應へず。

一夜、子の刻を過ぎて郵便を出しに行き、ポストより歸つて、門を入らうとする時ふと耳に入る、夜氣森々、月はおぼろ、慄然として水を浴るが如し、急いで家に入り衾を被く、想へらく、狸囃子は出て聴くものにあらずと。爾來、睡眠に入らんとする時は、狸囃子の研究を積む。

研究の結果、七五調であるか、八六調であるか、陽旋律か、陰旋律か、未だ其處迄は調は届いて無いが、只人間の悲しさ、日ねもす巷に戦つて、深夜枕上に思ふ處は往々、現世の快樂、功名野心等に責められるを、一度此狸囃子に耳を傾くるや、氣



自ら鎮静り身は自ら眠りて、夢は現世を離るゝこと一萬由旬、往生安樂國に天童と詩を語る、あゝ聴くべきものは狸囃子なる哉、

茗荷の子

裏に二反の茗荷の畠
香味よいとて子は取られたに

親はいつまで畠に残る
露にやつらかる霜にはすがれ

子に生れても親にはなるな
好い子持つても皆他のもの

鋤を止めて

冬咲く草花の種子を人より貰ひて、秋の彼岸にも近き此朝、庭の片隅の日あたりよ
き所に蒔つけんと、草刈る爲に求め置ける手輕の鋤取出し、土を柔かにせんとす。
疊ならば僅に一ひら二ひらの處、何の譯もあるまじと、土を耕し初むるに、木の根
あり、石塊あり、陶器の缺片あり、土は堅し、息ははづむ、浴衣一枚を脱ぎたれど、
猶ほ襯衣に汗はしとゞなり。鋤を止めて晴れたる天を仰ぎながらつくづく思ふ、吾、
野に耕耘ものを見るに鋤は自然に動くもの、如し、知らず之れ幾年の汗か土に泌み、
幾年の日光の皮膚を染めたる。あゝ三錢均一を利用して毎朝下町へ勤めに通ふ者も
労働は神聖なりと言ふか。

懸想文賣

小袖幕打つ元祿の
春の初めの大江戸に
懸想文賣、若菜賣
巷の戀は賑へり

羽子を隠して袖引けば
櫻鹿子のちらくくと
逃て行く子に解けかゝる
帯は吉彌のゆる結び

伊達を競うて練り歩く
都の町を悠々と
髯かくしたる覆面の
目出度さうなり揉烏帽子

女の習ふやまと假名
いづれ優しき秘言の
綴り込めたる文なれば
封じのまゝに渡し行く

投節流行る歌の世に
花は何より紅梅の

枝に結んだ戀占は
誰か縁をや定むらむ

故國の音樂

去三日上野の音樂學校で演奏會があつた、予は開會の定刻、二時に後るゝと十三分に着いた爲、聴衆堂に溢れて半分の空席も得る事が出来なかつた。如何に音樂好ても立詰は閉口する、良い工夫はあるまいかと思廻すと、是も後れて入場した一人であらう、カーテン垂るゝ窓側に形ばかり腰を下して居る男がある、それは外國人であつた。

尻の痛い位は辛抱すべしと、予も其外國人と並んだが、彼は英國人と見える、一體音樂會には聴衆に外國人の多いのが特色で、殊に當日の演奏者は當代の名流、曲は西よりの優しさもの勇ましものを選んだのであるから、彼等本國を離れて波濤幾千里、茲に故山の樂曲を聴くは何んなに愉快であらうと思つて今しも合奏の濟んだ後、拍手の音霰の如き中に、余は再び彼を顧盼つた。

見た處、然も身分のある人とは思はれぬ、普通の烏打帽を膝の上に載せて手を組んで、樂が終ると靜かに俛首いて、動くか動かぬ程に其唇の動搖が見える、恐らく故國の歌を想ひ浮べたのであらう。樂を聴く時の熱心と樂が歇んだ後の聯想との外に彼は何事も思つて居ない、今音樂堂には日本の令嬢、令夫人の衣の香、外國婦人の花の冠、滿堂醉ふが如く、胸は樂の響の高く低く、我を忘るゝ者は單り此一人の外國人に止らぬが併し予は此老いて可憐なる一外國人に少からぬ同情を持つた。然り、彼は齡五十を過ぎて居るかも知れぬ、西洋人は一跡若く見えるけれど確かに其位は行つて居る。皮膚の色も餘程日本化して居る處を見ると彼は極東の天に幾年の夢を結んだであらう、然して彼は自らの事業に成功したであらうか、今の自分の境遇は幸福であらうか、それは知らぬ、只彼は故國の音樂に聞惚れて居る。ヴァイオリンの連奏、ピアノの獨奏軍樂の合奏、聽衆は樂に十二分の感興を覺えた時、會は終つた、聽衆は樂堂を去る事を惜むかの如く蹙音も靜かに扉の外に一人々

々出るのである、彼外國人は何うしたであらう、彼は起つて今まで組合せて居た手を衣囊へ收めて悠然と立去つた、其跡に彼の持つて居た今日の會の目錄が落ちてあつた、予は彼の爲によし曲の名は忘れ樂師の顔の見覺が消ゆるとも、今日の感興は永久に忘れざらん事を祈つた。

新年の家

歳は来れり彼方なる
天の八重雲八千別けて
今黎明にみづくらふ
若き姿は整へり

歳は来れりすゞやかに
面を上げて歩み來る
清しき影のたゞよひに
倦んじたる眼も輝きぬ

歳は来れりつゝましく
山草覆う銀の
重き手函を捧げつゝ
秘めし曆を豫言せず

歳は来れり新しく
千載残る書ながら
みるめ眩ゆく手に觸れて
初めて開く扉かな

歳は来れり花やかに
一月姫の裾に生ふ

すゞなすゞしろはこべらの
野に見るものは清らなり

歳は來れり親しげに

部下せし朝戸より

盃舉げよ舞出でよ

興に入れよとおとなひて

歳は來れり吾家に

習慣舊く傳はれど

山新しき蓬萊は

壞るゝまゝに子等に任さむ

我子

左に抄譯するはゲーテの「ヘルマンとドロテア」の一節なり。此詩はゲーテ中年後の作にして、全篇物語歌の體を成し、田舎言葉を巧みにあやつり、奔放自在、我國人の眼より看れば到底詩とは思はれず。全篇七回の長篇なるが、左に意譯せしは僅に第三回の初め數行のみ、田舎者夫婦が我子の嫁を詮索する事より、端なく意見を異にし虚榮心に走らんとする父と、我子に甘く、又自ら子の心裡にも通ぜる母との、各の言ふ處、洋の東西を問はず、人情自然に現はれたるを見るべし。

暫く父の怒を避る爲に、ヘルマンは無言で、室の掛金を外して外へ出て行つた。父は牧師と藥種屋に前の對話を續けた。

『いやヘルマンのやうでは逆も駄目です、私は此れで既う仕方でもございませんが、責て彼だけでも人間並に育て上げたいと思ひまして、氣を揉んでも是じやあ望みがありません。何事でも自分から勇み進んでやツてのけんけりや成功は爲ない、菌と云ふ奴ですが、鳥渡生へたかと思ふと、痕跡もなく腐敗つて了ふ、それですよ、人

間が此世に生れて、飯を食ふだけで譯もなく土に歸つて行くのは、人間と生れたからにア何か一つ目覺しい事業を爲遂げて、後生まで彼の人とは……と呼ばれなきア、ね、一身一家を治めるのも、一國を料理して行くのも同じ遣方で、品に二ツはないのです。襪褌さげて、麴桶叩いて、他の家の門口へ立つやうになるのも、村とか町とかで塀や壁が頽れれば頽れ次第、倒れたら倒れ次第に爲てあるのも、皆精神が腐れ切つて、自分から良くしやうと云ふ氣の無い證據です、詰る處が然じやありませんか。だから私の悴でもです、旅行でもして、ストラスブルクや、フランクフォードや、又はマンハイムと云つたやうな、彼云ふ大きな市街でも見て來ると可いのです。立派な大都會を見ると、假令自分の住む市は小さくても、小さいなりに市街らしく爲たくなるもので、所謂公共事業です、御承知の彼の水道、それから道普請、家の建方、橋の改築にも及ばぬながら、私も一肩入れしましたのでナ、いくらか市街らしくなつたと云ふものです。其處へ來ると今の若い者は仕様がな、風の子見た

いに、ふーらふら、ふーらふらして徘徊して居るが、でないと家にばかり引込んで、暖爐に嚙り附いて居る始末、ヘルマンなども其方ですから何うも氣が氣じやないの
で』

母『あなたは何うかすると、彼子を不良ばかり仰るよ、何うせあなた、彼を御自分の思ふ雛形通りに爲やうだつて、然は出來ッてありませんやね。何なり斯くなり持前の氣質に適ふやうに教育して行つて、成る通りに爲て行かなくツちや無理です。皆それく、生來が異つてますもの、其氣質に依つて、將來は相應の者になるのですから、あなたのやうに仰つても、何になるもんですか。彼だつた今に立派になつて、益に立つやうな者になる事は、私が見抜いて居ます。爲りますとも、世間に出てから引を取るやうな子じやありません、人の上にこそ立て。それをあなた、始終、彼の心を抑制して、自分の思ふ通りに従はせやう、従はせやうとなさるから……それでは伸びやうがありません、全くですよ。』

然言つて母は倉皇出て行つた、愛する息子を連れ歸るべく、其行先を探しに。
出て行く妻を見送つて、夫は少し心を柔らげたらしう、微笑さへ浮めて
『一向理由が分らん、女や子供の言ふ事は皆自分勝手ばかりで、それじゃ是から乃
公は只ハイノで、何も言ふが儘になつて居なけりやならんからナ。

歳の暮

世を動かすに足る人も
時間の力に移されて
曆の紙の迫りゆくを
誰かは後にかへし得む

たゞ逆らはず偽らず
臚の操りを怠らず
流れのまゝに従はゞ
吾行る舟は静かなり

あとみかへりて胸底に
 やましき事のあらざれば
 年の暮るゝは自然にて
 何今更に惜むべき

晴着に締むる丸帯の
 模様は胸に畫かれて
 針目を急ぐ妻が手の
 夜の長さも厭はざり
 隠れし友も現れて
 都に家を持つと云ひ

女嫌ひのすね者も
 新妻呼ばん噂あり

巷歩むも急がれて
 逐はるゝ如く行年に
 愛たきことは苔みたる
 鉢の梅にもこもるらむ

吾家の花

牛込とは好く言つたもので、如何にも此區の人間は悠々として居る、お隣りの小石川へ行くと盛りの場所(比較的)には細民の生活がなか／＼忙しうさうだし、更にお隣りの本郷と来ると角帽二筋帽のステッキは如何にも時間表的に股を刻みつゝ歩いて行く、四谷は土臭し麴町は官風が吹荒むし、こゝ牛込と云へば山の手で最も吾々の住むに適して居ると、考へて住込んだ譯でもないが、居を移してより丸三年、何處かいゝところがあるらしい、就中牛込も奥の方と来て居ると蛙の鳴聲からして違ふといふ話、それで草木が育たなかつたら不思議だ。

家主たるもの餘り富豪でない見え、早稲田が大學になつても裏に貸家を建てざるこそ幸ひ、垣一重を境として吾家の周圍幾十坪かは凡て吾領分、花と家賃とは何等の關係もなく年々歳々栗も實れば少女椿も咲く、ナニ自分の家でもないのにと思

ひながらも、ツイ朝顔の種も蒔いたり縁日の秋海棠も植ゑる、此物言はぬ家族の一部は如何に吾等に慰藉を與へるであらうか、今一つ／＼此家族の名を擧げて見やう。

紅梅 八重でかなりの老木、去年やよひの生れた朝、花は眞盛りで花の間から見上る空は繪に書いた海のやうな藍色で、白茶色の残んの月が忘れたやうに紅梅の枝にかゝつて居る、此朝の色彩の美から推して見ても生れた子は美人に違ひなからうと思つたが、果してドクトルすゞしろのや、相して曰く、此子美人骨ありと、主人公大得意、茲に一歳は過ぎて又春は返り、紅梅は去年より十日ばかり後れて咲き、やよひは漸く這へるやうになつた、然しながら美人骨の鼻は段々低くなつて頗る頼母しくない、願はくは此紅梅の咲かん限り吾やよひも美しからんことを祈る。

櫻 八重なるは井戸端にありて花吹雪する朝の釣瓶の水は汲みかへても／＼花なり、行く春や幾度ごみとりに運ばれるか知れない、一重は二三本ある、皆若い。

少女椿 十二月にも暖い日があると咲き出す位で苔の内から細工に念を入れてあ
 るだけ、十重二十重咲き切らずにぼたり／＼と落るのも多い、一つ二つ咲いた時は
 最も可憐だが餘り澤山になるとうるさいから淘汰してやらうと、木をゆする、ばら
 ／＼と花の積ること二寸。

連翹 山吹よりは上品、二年前には花が二つ三つしかなかつたのに今年折つて
 床に挿せる位。

木蓮 紫なり、顧みず。

山吹 一重、去年植たが今年は覺束なさう、若し芽を出さないなら更に植ても
 よし。

山茶花 江戸生れの少女に似たり、さらりとして油氣のない處大いに氣に入つた
 柘榴 天竺から來た花だらうと云ふ、或はさう、花咲く事五百。實のなる事三つ
 子供争つて取る、年年の野分にいつも焦點にあたり、木大いに痛められ垣に傾く。

福壽草 たけて逢の如し、少しも目出度くない。

杜鵑花 未だ一度も咲いた事はない、杜鵑花にはちがいないが此厭世家は手水鉢
 の下にいつでも憂鬱としてのびかねて居る、あはれ。

栗の花 房のやうにぶら／＼して居る處は面白いが落ちて雨に腐ると蟲のやうて
 いやになる。

百合 此家へ引越して來た初めての初夏、前の年の秋に確かに？雁來紅を植て置
 いたが二葉の雁來紅が芽を出した、友人天聲梅溪醉夢等來りて此れ百合の葉だと云
 ふ、僕嘗て雁來紅が翌年百合に化けた試しは聞かない、其葉まことに雁來紅に違は
 ない、證據があるからとたしかに雁來紅と云ひ切つた、段々大きくなるほど百合に
 似て來る、僕は植物學に詳しくなかつたではない、全く前に住んで居た人が茲へ百
 合を植て置いた事を知らなかつたのだ。

白堇 うそと思召すなら裏のごみだめの隅を探すと二莖や三莖必ずある、但し紫



はない、これでも詩人の住居だと自らうなづいて人に言はず。

擬寶珠の一種、冬になると花も葉も莖も何も無い、杜鵑花の居候で、恐らく此れがなかつたら杜鵑花に花が咲くかも知れない、さらばと云つて根を絶えずやうな慘酷は出来ない恰も之れくされ縁。

秋の七草 女郎花 藤袴 刈萱 桔梗 萩 薄葛の七草は一叢かたまつて武藏野の秋は外ならぬのである、萩は紅白あり桔梗はむらさき。

萩に就ては逸事がある、去年一家擧つて歸省した留守中にのびたともく萩は小さい庭一ぱいにしだれたが、ある日晝間に其萩の咲亂れた下に書生體の曲者が忍んで居たさうだ、花下の君子、風流を解す、惜むらくは差配に見附られて追出されたる事を。

木瓜 言わけほどの花咲く。

桃 一木にして紅白咲分、俗様近づき難し。まことやどぶの傍に在つて偶まバケ

ツや手桶を乾されて、花遅く、お雛様の間にも合はず。

秋海棠 海棠に似てあはれなりとやら、主人のるすは女ばかりの家には是非ともあるべき花。

杏 花よりも實だが是も二つ三つなるばかり、一向問題にならぬ。

まだく名の知らぬ小さい草の花、秋は色づく蔓の實などいくらもあるが一々は言はれない、今年暇があつたら大いに種を蒔き苗を植やうと思ふ、細君曰く、三ツ葉もよし、芋頭もよしと、それでは少し閉口だが、ふち豆ぐらゐは恕すべし、愛すべき花だ、草では櫻草、松葉牡丹などは何處にもあるが欲しい、むやみと珍を好んでも詮方がないから僕は寧ろ平凡な花でも、自分の好なのを集めやうと思つて居る



哀江頭

入江に青む水草の
春、寂として聲もなく
岸の樓臺も鎖されて
忍び歩きの去りがてに
詩人の胸を痛ましむ

楊氏、帝の寵を受け

鳳輦に侍りて

従ふ宮女、花の如

色に映えたる草木の

時の榮えも夢と過ぎ

かよわき人の弓を帯び

身をひるがへす駒の上

一矢忽ち雲を射て

禽の翼を縫ひ得たる

清しきまみは今いづこ

あはれ芳魂とこしへに

都の空を慕ふらむ

渭水は清く流るれど

蜀山、路は遠うして



君が行幸の還らざる

世の變遷に驚きて

人は自然をふりかへり

去なんとすれば黄昏の

胡は駒を駈らせて

蹄の塵の城に滿つらむ

(漢詩譯)

手函の薔薇

私の持つて居る手函と云ふのは、茶色で彫刻も施てありますが、今は既う古くなつて蓋などが破れてますから、紐で結んで置くのです。其中には幼な時に弟と臥床の中で見た小さな油繪だの、髪の毛だの、いろんな細々した品を紙に包んで入れてあるので、其中でも一輪の薔薇の花是が其、他の御婦人方には決して無からうと思ふので、成程女と云ふ者は、誰でも互様に斯様手函に、細々した品を入れて持つては居りますけれど、さて私の秘めて置くやうな薔薇の花に到つては如何でせう、私の眼の曇る時、私の胸の疲勞を覺える時、女と云ふ者に對する信念の、覺束なく消えゝになりかける時、現在は苦痛、將來は絶望の外はないと思ふ時あゝ。此十二年の間、手函の底に萎んで居る薔薇の花が、新しい香、新しい色を以て、私を復活させるのです。恰當彼の小禽が、雪間に萌出た二葉の綠草に、春の近づいたのを自知



るやうに、春は必ず私にも来るだらうと自知るのです、自然に何の偽がありません。

此手函には他の花も入れた事があるのです。左様、何でも暑い日の午下でした、あの男子と同道に、村を通過しました時、其方が手を伸して摘んで下された白アカシヤの花も、此中にあつたのです。併し考へて見ますと、其時は雨の降つた後で、アカシヤの梢から雫がハラ／＼と滾れて、私の上へかゝりました。で、無論花も濡れて居たでせうから、包んだ紙に微が生きました。其後幾年か経て其花は捨て、了ひました。今は只、アカシヤの花の乾いた香氣が、微かに函の中に残つてあるかと思ふだけで、其ある日の午下の事を僅に追懐させるに過ぎません。單り薔薇の花ばかりは以前の儘、ちやんと函の中に收つてあるのです。

私が未だ十五歳の頃でしたから、随分と久しい以前の事です、ずっと片田舎の小さな町へ参つた事がありました其町と云ふのは、まだ新しく開けたばかりで、次の村

迄は随分と隔たつて居りました。中には妻子を控えたのもありますが、住民の多くは獨身の男子でした。私が参りました時には評判の少女が居りました、少女と云つたら其子一人限りで、齡は十七ばかり、鈴のやうに張つた眼艶々した毛髪、唇は少し厚く、口重のやうに見えますが、笑ふものなら、靨が溢れるやうで、皓い齒が一時に輝くのです、それは肉附も良い、縹致には申分ありませんでした。村長にも獨娘がありましたし、村端れの農家には二人まで娘はあつたのですが、私も見た事はありませんし、他も亦在るとは云ひませんで、只少女と云へば、其子獨りに限つたやうな有様で、男子の騒ぎ方つたらありません。宛然此町の女王です、慕ふと云ふより寧ろ擧つて尊崇するのです。何處へ行つても其子の噂ばかりで、巷の角に立止つて、誰を見て居るのかと思へば、其少女が通るからだと云ふのです。爾云ふ工合ですから、其女にお辭儀でもされるか、一緒に連立つて歩いてゝも居やうものなら、それこそ大變、何と云つて多くの競争者に嫉まれたでせう。で、彼等は競

つて其少女の家に花を興へるやら、馬を送るやら、中には、はしたなくも結婚を申込む者さへありました。一面から見ますと、斯んな片田舎の事ですから、他に對手が無いだけ、一人の少女の足下に、多くの男子が、愛慕の情を捧げたと云ふのも、無理はないと思はれました。只愛する餘りに、互に嫉み合ふと云ふ點は、聊か卑劣でした、以上のやうな様子ですから、若し其女に氣があつて、誰と極たなら隨意な處へお嫁に行けたらうと思ひます、實際爾信じられるのです。爾云ふ時に行合したのは私でした、私は其女より美しくなかつたでせう。確かに其女程美しくなかつたに違ひありません。ですが私には活氣がありました、且新しく参りました何と云つても其女は古顔ですし……と云つた理由ですか、如何ですか、兎に角多くの男子は私に跟づいて來たのです。花は私の家に舞込み、馬は一頭にか乗れませんのに、二十頭も貰ひました。街頭に待たれるのは誰でせう。若い男の談柄になるのは誰でせう。腹の底で嬉しからずには居られません、嬢はお美しい

嬢は好い標致だと、まさか面と對つては云ひますまいが、チラホラと耳に入る毎に、世間見ずの私は、自分を信ずると共に、彼等の語をも信じました。而て實に、此は或一人が言初めたのを、他の人々が盲從して言はやす一時の流行であると云ふ事に、氣が附かなかつたのでした。男子に結婚を申込ませて、否と一言に拒絶するのを面白がつて、畢竟男子を蔑視したのです、また他人に語を優しくするといふこともなく、心中また人の母たる情の芽生さなかつた當時の私には、只自分の勢力を嬉しがつて、子供が新しい鞭を、當るを幸ひ振廻したやうなものであつたのでせう。男子と云ふ者は何故自分を斯んなに愛するか、一向譯分らずに楽しんで居る間に、一つの苦痛が湧出しました。外でもないが、彼の少女の見棄てられた事で、それが私に堪へられなくなりました。夢見て居るやうな眼と云ひ、寛容とした歩き振と云ひ、緩かな聲と云ひ、皆私の意に適ひました。て其女が若し、男子に對つて笑ふやうに、只た一度でも私にも、其輝いた面に靨を湛へて、莞爾としたなら、何んなに欣んで

其女を褒めたてせう。が、それは遂に望んで得べからざる事で、其女は私を嫉んで居ました、死ねかしと思つて居ました、此村に來ねば可い奴をと怨んで居ました、屹度爾だろうと感じました。

何日でしたか、野駟を行りました時に、毎も其女と馬を駢走らして居る男がわざ／＼私の側へ來ましたから匆附けて遣つた事を、其女は知りません。又或る男が私の前で、少女の語の寛容して居るのを嘲笑て。私の愛を得やうとしました時にも、烈しく叱り飛ばして二度と私の側へ來られないように爲た事も、恐らく其女は知なかつたてせう、男子が宿場に集つた時に、其女と私と孰が美しくいと云つて、賭を爲た事があるさうで、來る人に聞糺した結果、私に賭けた方が勝たさうで、其事は彼の女にも知れ、私も彼女に知れた事を覺りました、憎らしい男子共です。私は其女と一度も語を交したことがありませんので、往來で逢つても、目禮だけて別れ、握手を致しても無言加之滅多に面を合せるやうな事はなかつたのです。け

れども逢はないだけ、先方の感慨が、私にも感じられて、遂に決心しました。もう私の去るべき時が來ましたので、愈よ明日出發と云ふ日、知己の人々は送別會を開いて呉れまして、一村は擧つて招待されたのでした。

時候は恰當冬の半で、園に咲いて居る花と云へば寒菊と冬牡丹だけ、こゝ二百哩以内で、傳手や金銭で購はれるやうな薔薇は一輪も無かつたのですが、只私も知つて居る家の、竈と壁の間の日當り好い片隅に、一本の薔薇が有つて、眞の一つだけ蒼んで居たのです。其白い薔薇こそ彼少女が、送別會の餞別に爲ると云つて、約束してあつたのです。

日は暮れました、會場に着いて、外套を脱がうと待合の化粧室に入りますと、其女は既う前に來て居りました。潔白な衣服を着、肉附の良い腕と肩を現はし、燈火に映射つて、姿は輝くやう、胸には一輪の白薔薇が挿してありました。

『今晚は』

私は軽く挨拶したまへ、古けた黒い服の黒の襟飾を整へやうと、直ぐ鏡の方へ對ひました。忽ち私の髪に誰かの手が觸れました。

『ちよいと、端然していらつしやい』

實に其少女の口から出たのでした。

覗くように鏡を見ますと、今、胸の白薔薇を抜取つて、私の髪に挿さうとして居るので

『まあ何と云ふち黒い髪でせう、よく似合ひます』

云ひく後ろさまに一步下つて、又右視左視、

『貴嬢の頭髮に挿しますと、花も一倍美しう見えただでござんすよ』

私は願勝つて

『貴嬢こそ、頭髮も何も美しくていらつしやいます』

『オヤ左様』

と、例の悠々した調子で

『お世辭の好い事を仰います』

二個は歩き出しました。

程なくドヤ／＼と大勢の人が参りましたので、私共も離れ／＼になりましたが、其

限り逢ひませんでした、否、只た一度、摺違ひさま、微笑を見せたゞけて。

翌朝町を去りました。

以來、再び彼少女には逢ひません。

幾年かの後ち、人の妻と爲つて、アメリカの方へ行つたと聞きましたが、爾かも知

れませんが、爾でないかも知れません。兎に角、白薔薇の花は、今に手函の中に香を

留めて居ります。

さゝやき

朝あけを涼しき音に
白蓮の花は開きぬ
夕山の小鳥の聲は
はれやかに樹間を洩れぬ

『さゝやき』を聞かんとするは
薔薇色にあけ行く空か
喪の衣に暮れゆく野邊か
あきたらて君はさまやふ

羅衣の撫肩の上を
風吹いて風去るがごと
永遠にやまずはしなき
世の聲を聞くには若し

まなさは夢見る如く
あつめたる眉毛をさなき
耳の根を右手に支えて
白き頸やゝかしげたり

森を越えて遠に消えなん
『さゝやき』は野にも聞えず

柴垣の背戸に歸れば
蔓草の裾にまつはる

この夏を琴柱も立てず
そぞろ氣の何にうつりし
山や水や冷たき聲に
君は少女の耳やかすべき

君が爲にさゝやくものは
ほそき針に蜜を含めて
小き傷みと甘き眠りを
うつくしき胸に刻まむ

愛子の死

愛子は死んだ。

否、死んだのでは無い、其顔を視ると死んだとは言へぬ、神様が斯んな可愛らしい子を造つて置いて、未だ息だけを入れなない姿だらう、それだなくて斯んな美しく、静かな、又哀なやうな死顔があるものではない。死と苦痛とは帆と風のやうなもので必ず、伴つて来る、愛子の顔には一點も苦痛の影を認める事は出来ぬ、それでも彼女は死んだのであらうか。

小指で押しても倒れさうな脆弱な彼女は、死と謂ふ大きな魔物に捉えられた、捉えられても少しも恐れなかつた。生れたまゝの美しい眼、而して又何處か斯う氣高いやうな容子は、些も變らない。心配の痕も無ければ、病苦や疲勞の影も見えぬ。一度死と謂ふものに襲はれると、轉瞬の間に其人の前身とは、いたく異つた相恰を

與へられると聞く。然るに彼女は何處に其面變りの跡が見えやうか、吾等は疑ふのである、只見る、其靈魂だけは遠い、幽かな處へ休息に行つて、身體は靜肅に、平和に此處に眠らせてあるのだ。

古い煤けた洋燈の影に、輝くやうな美しくい顔を照らした以前の事を追憶すと、其頃の面影が自然と眼前に浮ぶやうである。それから彼の夏の涼しい朝、貧乏な場末の代用小學校の門前で、能く此子の顔を見た。又冷たい雨の降る夕方などに、竈の前で火にあたつて居る姿も見えた、或る人が子供を亡くした時、其枕邊に坐つて、ちやんと温順しい顔をして居た事もあつた。併しもう彼女が感情の儘に、活々として働く姿は再び見る事は出来ぬ。彼女の可愛がつた小禽は、籠の中を自在に飛翔つて居るけれども。

祖母様は其萎びた手に、愛子の手を取つて、確乎と抱くやうに胸の處へあてゝ居る、冷たくならないやうに暖めてやるのだと云つて。何と哀ではないか、素より彼女は

病氣であつたのだから、身體の自由も利かなかつたであらうが、それでも祖母様の膝の上へ自分の手を伸す事を知つて居た。祖母様は今でも其手を確乎と握つて居るので、愛子の枕頭は一寸も動かない、折々集つて来る人達を顧盼して、恨めしさうな顔をした。出来る事なら今一度愛しい孫を活かしてやる工夫はあるまいかと願ふのであらう、併しながら既萬事休す、醫藥の力では及ぶ事ではない、彼女は正に死んだのである。

祖母様は下を向いてつく／＼と愛子の顔を見る度に、熱い泪がはら／＼と滾れた、而て口では斯う言ふのであつた。愛子は私共の子供ではございませんのでした。假に私共の家に生れたので御座いませう、愛子は極樂へ旅立ちました、娑婆と極樂と孰が宜か、比べる迄もないのです、もう／＼何と言つても愛子は歸りません、いくら貴い御經を唱けたつて愛子は歸りませんから、ハイ／＼結構な所へ行きましたと。少し許り愛子の臨終の様子を語らう。

愛子の終焉が近づいたと云ふ事が知れた晩、向の内儀さん、隣の先生、何某誰某、皆其枕頭を圍繞いた。愛子の爲に面白い話をする人もあつた、分り易い書物を讀んで聞かせる人もあつた、夜の明ける前、彼女はすやくと睡眠に落ちた。人々は想つた、彼女は楽しい夢を見て居るのであらうと、祖母様と一緒に面白い旅でも爲て居るのであらうと。彼女の寝顔には屢微かな笑が洩れた、少しも病ましい處が無く、不安な處が無く、例へば何處からともなく響いて來る音樂を聞いて居るかのやうな面貌、屹度楽しい夢を見て居るに違ひないと想つた。

彼女の夢は覺めた、靜かに眼を開けて、水を一杯と乞ふた、直に汲んで遣つた。彼女は一口呑んで、さも満足したやうな、嬉しさうな笑を面に浮べて凝手と祖母様の方を視た、其哀なやうな笑顔は、側に居た人達にも永久忘れる事は出來まい、しかも再び見る事は出來ないのだ。彼女は細い手を出して、祖母様の手を握つた、――傍らの人達は彼女の死んだと云ふ事を初めの中は知らなかつたのである。

愛子は平素から子供にしては沈着た健實な質であつた、だから少しも怪し氣なく、又呻吟や囁語は些も洩らさずに、夏の夕の夕影の、次第／＼に消えて行くやうに消えていつた。

斯くして彼女の小さな歴史は終つた。

毎に活氣を以て充たされて居た彼女の室、彼女が物言はずになつて、俄に淋しくなつたやうに思はれる。彼女の花園、彼女の育て上げた草の新芽、彼女の歩いた小道、彼女の座つて居た芝生、それらの場所は昨日と何の變つたことも無い、只、彼女の影が見えない許りである。

愛子の友達にお絹ちゃんと言ふ女の子があつた、愛子の死んだと云ふ事を聞くと直ぐ、弔の料に花束を持って尋ねて來た。花束の中には紫の桔梗と、枝ながらの果實とがあつた、梗桔の花は愛子の好きな花で、枝についた果實を見ることも好きであつた。朝早くお絹は、いつも愛子の遊びに行く花園から取つて來たのである。

お絹は愛子の室の窓の下を、彼方へ行たり、此方へ來たりして居たが、愛子は獨り室に取殘されて、寂しがつて例のやうに自分を待つて居るやうな意がしてならぬ。其處に居る人に、おばさん、私を愛ちゃんの傍へ遣て下さいよと頼んで見た。譬へ愛子が死んで居ても決して騒いだり泣いたり爲ない、其證據には此間も或る親類の子が死んだ時に、傍に居たけれど何ともなかつたからと、子供心にも誠實を表はして頼むので、居合した人達も、愛子の側へ行く事を許して遣つた。お絹は愛子の顔を覗き込んで莞爾した、物も言はず横にはなつて居るけれど、昨日の儘の姿を見ては、猶頼みに思ふのであらう。祖母様は情に堪へぬやう、さめくと泣出すのである、お絹はいつかど慰める積で、些と外を散歩して御覽なさい、意が紛れるでせうと、勧めてみる。

地の上の愛子の姿を、永久に隠すべき時が來た、祖母様はお絹の眼前で、彼女を寺へ遣る事は忍びないと言つて、お絹を去らしめた。二三人の人達は果實と草の花を

持つて歸つて來た、又新しく永久の寢床を作るのであらう。

寺は極めて近かつた、鐘の音は悲しげに餘音を曳いて響き渡つた。あゝ寺の鐘、彼女は晝となく夜となく、此鐘の音を聞いたであらう、彼女の優しい情には何んな響を傳へたであらう、——其寺の鐘、今は彼女を弔ふ終の響となつた。

よろ／＼と杖に縋つた老人、氣力に充ちて威勢の好い青年、覺束なさうに瞳を動かして居る懐の兒は母に抱かれて、皆、彼女の棺を取圍んで居る。

氣力も衰へて、感覺も鈍つて、十年も前に死んで可さうな老爺や老媪は、聾になり、盲になり、中風になり宛ら死と同じやうな姿で以て、未だ生存て居るのに、あゝ彼女は——其老人等に棺を見送られて。

寺の玄關、彼女は能く此處へ來て、四邊の寂寞しい景色に化せられて沈黙つて了う事があつた。棺は其處を通つて古いお寺の稍奥まつた堂の中へ据えられた、夕日の弱い光線は、薄暗い堂の中に据えられた棺の上に射して居る。窓近くには芭蕉の葉



がさはく〜と風にさ〜やいて、意味のあるやうな小倉の聲、無常迅速、抑も何者に永劫の命があらう、塵は塵に歸り、木の實は土に歸る、斯くて靜かなる愛子の葬られる事を誰か辭まうや。

多くの手向の花は棺の前に投げられた、獻獻の聲、唱命の聲、冥する者、祈る者、人さま〜の情を表はすにも、此時ほど誠實なるものはない。

儀式は終つた、流石に合葬者は直にも去りかねて、二三人或は四五人、踞んだり佇んだりして、何事をか語つて居る。墓標の立てられる迄、見て居やうと言ふのであらう、而して思ひ〜に此可愛らしい死者の生前に就いて、語り出した。恰ど斯う云ふ風に此石の處へ腰を掛けて、何やら書物を見て居たこともあつた、爾かと思ふと、書物は前掛の上から廻り落ちたのも知らずに、天を仰いで、何事か考へて居るやうな顔をして居たこともあつたと一人が言出すと、他の一人は、さう〜そんな事もあつたけ、それに又何うして彼んなに氣丈夫だつたらう、夜でも寺へ入る事を

恐怖がらなかつたと、暗いことや、淋しいことは彼女に取つて何ともないんだ、いつか小さな壁の穴から月が射すだけの、眞暗なお堂の中に一人で居た事もあつた、と言出すと、だから早く死んだのだ、成程早く死ぬ子は何處か違つた處があると云ふが眞個だと、語を合す者もあつた。兎角、會談て居る間に、棺は新しく堀つた穴の中に埋め、其上から柔かい土をかぶせた。

新しい墓標は立てられた、日は全く沈んで了つた、夕暮の色が迫つて來た、此靜肅る場處には何の物音も響いて來ぬ、見ると早、月が出て居る、寺の壁も、柱も、檐も、記念碑も、墓石も、皆白い光に輝いた、殊に月は彼の新しい奥城の上を靜かに照らした、會葬者は言知らぬ信念の起るを覺え、皆默然として去つた、只、彼女を神と共に殘して。



いのり

『月の光に彼を醫せよ
我等の王を死より救へ』
救ひを月に祈りたるは
西アフリカのオゴエなりき

『風、蓮池を吹くが如く
汝の戀の實は落ちなむ』
爾叫びたる印度人は
戀の成れるを信じたりき

人よりさきに『ことば』ありて
『ことば』は神と共にありき
肉躰となりて人の胸に
智慧と信仰を與へたりき

祈禱のことば、呪咀のうた
悪魔を退け神を招く
妙音天女琵琶を取れば
御聲諸天に響きたりき

神ならましを

『ことば』もてる

流や花や

草や蝶や

さしやくものと

うたふものに

汝等などて

教乞はざる

片羽を奪へ

君よ、天使の片羽を奪へ、戀は君の前に跪かむ。菩提樹の木かげに、愛の泉湧き、愛の泉の畔に天使眠れり、君は此方の木蔭に立ちて天使を窺ふ、其眼は天路の榮光にかじやき、其耳は春野にひびく鼓の聲を聞かむ、其足は罫にかゝりし兎の如く、其唇は水にたゞよふ花の如く、君よ、もろ手を胸にあて、心臓のひびきを聴け、戀に臆すること勿れ、勝に乗る兵者のごと、天の羽々矢をつがひてするどく放て、天使の片羽を縫はんまで。

片羽縫はれたる天使は、九天に歸ることなけむ、君は愛を俘にしたり、とこしへに泉の畔にねむれ。

他の天使あり、打羽ふりて下り來りぬ、靜に眠れる天使を呼びさませり、君よ、眠れるふりして天使の會話を聞け。

後の天使、初の天使に問へらく。
何故に吾曹の樂園に歸らざる、大神は汝を召すこと急なり。
應ふらく。

歸らんにも吾片羽は人に奪はれぬ、人は吾を愛せり。

愛せりとや、そは欺ならむ、彼等はつねに欺くものなり。

あらず、吾は欺くものを愛す、彼は吾を欺きて眠れるひまに吾を射たり、併ながら、彼は永遠に欺き得ざるなり、初めは欺かんと思へり、終りに愛せんと懐ふ、戀は光線の如し、これを分析して青しと云ひ、紅しといひ、黄なりと云ふは欺けるのみ、光線は色なきものを誰かは愛を分析すべき眼鏡を持たむ、愛なき境に到りて甫めて愛あり、初め愛せんと云ふは偽れるのみ。

後の天使は心もとなげに云ひつけり。

醉えるものはいつか醒めむ、人の愛やとはにうつくしからず、汝が片羽奪はれたる

は、汝の左の胸を傷つけられたるなり、汝は知らず右の胸の傷つけられざるまに、
とく大神の許にかへれ。

見よ、いかに愛に眠れる人のうつくしきよ、時は恒河の水なり、滾々として盡さず、
愛は岸の花なり、うつくしく咲き又うつくしく凋む、吾に於ては一分の間たりとも
うつくしきものを愛す。

あゝ吾は歸らむ、汝が片羽を人より取返さん日の近からむを憂ふ、汝は吾曹を見捨
てたりや。

否、見捨てず、愛する人を愛するのみ。

後の天使は再び天に歸らんとす、吾天使は、はれやかに愛の歌をうたひ出せり。

君よ、天使の片羽をとこしなへに抱け、君は人の世に於て、衰へざるもの、枯れざる
もの老ざるものとならむ。

駿馬

戦ひ有りて國の血は
 高粱の葉に注がれぬ
 召すとは聞けど飛彈の奥
 未だ駿馬もあらはれず
 怪童丸がふるひ打つ
 葉竹の鞭に懷けられ
 草ふみ返し空に馳せ
 來ひともせざる野馬かな

繪師

若き繪師はいたく疲れて昔滑かなる岩角に身を凭せ、眺むるともなく雲なき秋の空
 を打仰ぎぬ金風蕭瑟、旅衣の襟も正さるべき美はしき日なり。

花と生れて折られぬ花は

秋の野菊か紫苑の花か

細くつややかなる聲、岩の後ろの、柏の樹の後ろの、蔦紅葉這ひ縊はれる杉木立の
 後ろより洩れ來りぬ、途ありとも覚えねばあやしと繪師は耳傾けぬ、前の流れを隔
 てし晩稻や荳残せる幾段の山田に秋の日黄なり。
 歌聲はやまず、繪師は立上りて一步二歩雜草を踏分けんとしぬ、歌聲は更に流れの
 下にゆきぬ、さては途にこそ出てけめと肩にかけたる寫生板を取直しあへず、流れ
 に添ひて途を下りぬ、半町、一町と遂に途は曲れども影は見えず、又もや途なき森

に分入りけんにわけいと繪師えしは怨うらめし氣けに佇た立たみぬ。高たかき／＼梢こすねの上に百舌ももずしき鳥とり頻ひんりに鳴なく、何なんの實みかは知しらずばさ／＼と木葉このはに觸ふれてがさりと地ちに落おちぬ、山やまを寫うつし水みづを寫うつし、村むらを寫うつし家いへを寫うつしたる繪師えしは、聲こゑ好よき人ひとを寫うつさんと思おもひしなり、流ながれを下くだらばもとの里さとにや出いでむ、心こゝろを歌聲うたごゑに残のこして繪師えしは上のほりゆきぬ。
二三町ちやうのぼ上りしと思おもふ頃ころ、流ながれに響ひびき來くる歌聲うたごゑの、又また其その水みづにあらずやと繪師えしは胸むね轟とどろかして立た止とどまりぬ。

花はなと生うまれて折をられぬ花はなは

秋あきの野菊のぎくか紫苑しぜんの花はなか

繰返くりかへして歌うたふはまがふべうもなく其その聲こゑなり。折をれやせんと紫苑しぜんの花はなをよけて、旅草たびわら鞋じを前まへの方に投なげ出し、腰こしをかゝめ息いきをひそめて窺うかがひぬ、秋あきの日ひ淋さびしく鈴すずの音ねに順禮じゆんらい歌うたも聞きえず、落葉おちば搔かく子この影かげもみえぬ山路やまぢの裾すそにて、美うしき、聲こゑの主ぬしにわざと、道みちをや問とはん、住すむ里さとの名なや問とひて、其その姿すがたをこそ吾わが繪筆えひつになさめと、繪師えしは待まちぬ。

花はなと生うまれて折をられぬ花はなは

秋あきの野菊のぎくか紫苑しぜんの花はなか

あとあとは忽たちち一ひとしほ高たかくなりし水音みづねに聞きえずなりぬ、遂つひに再またび聞きえずなりぬ、若わかき繪え師しは若わかき美うしきはしき少女せうにょの姿すがたを胸むねに描かきて、いつまでも花はなの上うへに待まつやらむ。

畫 顔

草の中なる蔓引けば
 遠くに揺れて畫顔の
 花は小さく傾けど
 畫を恐るゝ色見えず
 眞夏、裾野の草いされ
 静かに登る富士行者
 一萬尺は高けれど
 仰がぬ人に花のまつはる

紫 苑

旅の子の額白きに過ぎたり、女ならば、まだ前髪あげぬとし頃を、道芝の露に瘦せ
 ゆくは、さびしき母や持ちたりけむ。
 もろ手伸ばして、草鞋の紐の解けたるを結ばんとするに、胸打ふるひぬ、かすかな
 る地ひゞきして心地ふらくとするに、それよ、秋はなる多しと、つぶやきつゝ、
 空にたゞよふ根なし雲を見あげたり、草の上におろしたる腰のあたりに、紫苑ひと
 もと、ゆらくとうなづきぬ、旅の子の眼にはとまらざりき。
 又行く、二三町にして、紐打ちゆるみぬ、このわらんづの心もとなさよと、片山か
 げの石にゆけば、そこにも其花あり、心にはとまらざりき。
 果して四五町ゆくうちに紐は切れぬ、落ちやすき日の斜なれど、雲井のはては、遠
 かること、旅の子は行く手を止められたらんが如くすめり、若うして急ぐは戀しら

ぬにやあらむ、宿かしまゐらせむかと紫苑は其裾にさしやきぬ、聞えざりき。
七つから男を戀ひて紫苑の花とは生れけるよ、菊に肖て世に長けぬがあはれなり。

海の幸

潮待ち出づる磯邊舟
幸ある日には幸を獲て
海より歸るいさなとり
亂るゝ雲に風を恐れ
辰巳の風に雨を知る
朝に獲たる海幸は
網より抜けて人に往ねど
人と自然の潮境ひ
寵ある神に任せたり

高野街道

大阪を外れて二里足らず、國道坦として、山遠く野廣く、眠るが如き風光を見て、大和橋の上まで来れば、路は和泉に入る、千兩箱を積んだ馬士斬の昔はしらず、今は密柑を運ぶ荷車と、普陀落や岸打つ浪の巡禮姿と、入交りて紀州街道は幾十里時間と云ふ感想の頭のない田舎者の、んささは、洋傘を杖いて天下茶屋、住吉と覗き歩いて大和橋を渡れば、こゝが堺、妙國寺の蘇鐵を見て行かうかなあと、隣村の權兵衛に相談する聲をきゝつけて、此奴免すべからずと附隨者を道者引と云ひ、又庖丁引とも云ふ。

舊幕府の頃より切物は堺の名物で、文珠何某、菊地何某のいかめしき看板、今も田舎者をおどかす、店々に引子と云ふものありて、赤毛布旅行く人の袖に縫りて、一挺でも買はさでは置かぬ風習、止みさうで止まず、正直な田舎者は斷るに困り、腰

を休めるつもりで、番頭が舌先の切味に、店先の囚となることもある。

「卿方も高野へお参詣ですか、旅をなさるにもお天氣の續くのは結構でございます」歩きながら不意に語を掛けられたので田舎者は變に思ふ、と見るに紺の筒袖に白の股引と云ふ風粧、氣の利かぬ床屋の主人か、それとも紺屋の職人か、頭の禿工合など巾着切の人相とも見えないので、やつと胸撫で下して、懐の手は出したが、顔をしげく〜と見て、何とも返答はせぬ。

「イヤナニ卿方も高野へお参詣なさるのなら、能く、聞いてお出でなさい、此道は紀州街道で、堺を外れると道は二つに別れて居ます、此道を眞直に行くと和歌山へ出る、左様、よろしいか、左へ取つて行くのです左へ、知らないとお大變なことになるますから、私はよく旅の方に教へてあげるんですか」

「ハア、そりや難有うがした、私らハア關東者だが、こゝは堺ちふんだか」

「左様です、堺と云うて昔はそれでも鐵砲鍛冶が、三町の間四十二軒あつたと云

ひます、維新の後になつてから、鐵砲鍛冶も大抵無くなりましたが、それでも豪いものだ、良い鍛冶屋は今でも残つて居ます、切物の良いのは、何處の國を探しても及びませんな」

さも感ぜしめるやうに云つて、又あとを續けた。

「卿方も妙國寺の蘇鐵を見た序に、これをお土産に買つて行きなさい、悪いことは云はぬ、わざ／＼遠國から注文してくるのさへ澤山あります、郷方は直ぐに買へるのだから、品物もあさる事が出来るし、價の安い店も教へて上げませうし、かみそり一挺でも買つて行きなさい、又と來られんじやないか」

「その剃刀は何處が安いか、卿知つて居なはるなら、教へておくれいな」
不意に後から慫ふ云つたのは、上方訛りの、穢ならしい風躰の爺さん、對手が違つたので道者引はけろりと爺さんの顔を見る。

「お前さんも高野詣かナ、剃刀を買ふのなら、いゝ店を教へてあげやう」

「眞に宜い店を教へておくれなら嬉しいこつちや、私も卿はん坊主にならうと思ふてな、それでお寺さんへお土産に持つてゆくのに、何がえゝか彼がえゝかといろ／＼思案してみたんやが、今卿はんが、剃刀言うてじやさかい、成程こりや宜えわいと思ふたんやがナ、其剃刀で私の頭も、くり／＼とやつて貰うじやテ」
關東者は不思議さうに聞いて居る。

「娘と家内が悪い病を受けてナ、それで巡禮に出たんやが、歸つて來んのぢや、私も因果とあきらめて、それで坊主になつてこまそかいと、やけくそになつたもの、何の勝手も知らんさかい、えらい心細いんやが、卿はん勝手を知りなはらんかいナ」

「坊主になる勝手を存じねえて、此の人は何でもハア存じとるから、聞いて見るがよかつペいな」

庖丁引はすれど坊主引はせず、剃刀一挺此爺に賣りつけた處で何程の口錢になるも

のぞと、いゝかげんに言ひくろめて道で別れ、いつのまにやら、ものと大和橋の袂へ戻つて次の椋鳥を待つ、何が渡世になることやら、其昔弘法大師も御存知なかつたてあらう。

朝顔の葉

寧樂近き

壊れたる

朝顔の

むだ花は

西の京

築地より

蔓延びて

傾きぬ

繁き葉は

掌に

破りては

朝々に

里の子の

鳴らされて

摘みくゝて

葉は減りぬ

それ昔
九重の
地に落
袖の上
に

大内裏
朝顔よ
裂けし
葉を
持て行
かむ

繪心も

動かさ
る

草の葉の

一ひら
に

我胸の

わなしく
は

共に愛し

命なり

諸天女の

雲に舞
ふ

金堂の

脇立に

旅人が
折りよ
げの

捧ぐべ
き
萩はあ
れ

土落て

瓦出で

築地とは

形ばかり

纏ひ寄る

朝顔の

瘦せたるが

いとほ
しき

わが家の正月行事

(友に報ずる書)

年賀状は暮のうちに書いて置かう／＼と思つて例年矢張今日でないと書けないことになる、朝のうちから炬燵の上で四五十枚書飛ばして腕がだるくなつた、謹賀新年の四文字は大分上手になつた、併し紋切形で少しも面白くない、君には一つ手紙を差上やう。最も正月早々肩の張る議論でもなからうから、我家の正月行事の中で最も珍しいのを知らさう。それは我家の人間の數より神佛の方が倍以上のお雑煮を召上ると云ふ事でもない、七十四のおばあさんが二日の朝、闇いうちから年立ち返る旦より水も若やぎと、若やいだ聲で弾初をする事でもない。外でも舊弊を守る家ではやるだらうと思ふが神聖にして犯すべからざるものとしてあるのは金祭りの事だ。御存知の通り僕の家は商家であるから自然斯云ふ儀式も行はねばならぬので、さて暮のうちに氏神から砂を借りて來る、砂と云つても只氏神の境内の砂でさへあ

れば宜いと云ふ譯にはゆかぬ、本殿の屋根の雨垂の落ちる處の砂に限るので、人の知らぬやうに紙袋に一杯借りて來て收つて置く。金祭りは大晦日の夜の八九時頃に執行するので、無論主人の役だ、先づ床の上に三寶三ツを安置する、それから初めに牛様を清めて一つの三寶に載せる。此牛は陶器で造つた極めてお粗末な牛の寢像で、平常は神棚の隅で鼠の隠れ場所になつて居るが、お正月に限り床の間へ出世するのだが、是を神棚から下して掃除すると鼠の糞が一合は確かに出る。下には紙に包んだ小判が一枚敷いてあるので、此紙も煤と小便で眞黒である、小判は出して祭り用にする。そこで牛様が黒いながらも塵を拂はれて三寶に乗ると、牛様の爲に箸と清水とを供へる、清水は井戸の水で宜い、小さな壺へ入れて三寶の隅に置く。箸と云ふのは梅の枝を用ふるので、特に提灯へ火を點けて、庭へ下りて老木の梅の木

の辰巳の方に向つて伸びた枝先の成べく生々とした處を五六寸宛、稍長短を作つて剪る、新しい半紙で箸紙を折り水引で結つて右の梅の枝の箸を挿す、是で牛様の分

は出来上つた。次はいよいよ金を祭るのだが、前に氏神から借りて来た砂を、三寶の一ツへ盛砂のやうに高く盛つて、其上へ金を植るのだ、其金も金祭りの外には滅多に出さないのて常は穴藏の底深く納めてある。先づ頂へは小判二枚、此中一枚は牛様が敷いて居たので、次には一分二分、一朱二朱の古金銀、祖先が徳川様とやらから拜領したと云ふ何とか金やら、二十種内外盛砂の上へ植附けて、下へは小珠を置く。古い金銀ばかりでは稍物足らぬと云ふので、十圓の新金貨、五十錢二十錢十錢の銀貨、白銅、一錢銅に至るまで砂山に生る事となる、此三寶が中央に置かれ更に左の端の三寶には、油一升も入らうかと思はれる大土器を据ゑ、油を一杯注いで燈心を七本入れ、一つ宛別々に火を點る、是を七曜星にかたどつたもので、火は西の方へ向ひ、一度注した以上は油のつぎ足しを許さぬ、それでも七ツの星の光りは元日の正午過まで残つて居る、以上總稱して金祭りと云ふ、元日、二日、三日は其儘に爲て置いて、四日の朝、取片附ける、牛は神棚に、金は穴藏に、梅が枝の箸紙

は店の天井裏に貼られ、壺の清水は十字街頭に捨てられ、金を植た砂は折を見て氏神へ返しに行く、抑も是れ如何なる因縁由來のある事か知らないが、只祖先よりの慣行で、僕の代になつても齋戒沐浴して是を行ふ、東京のやうにお正月が来たからとて、神棚一ツ新しく爲やうともせぬ家の多い土地では、或は珍しい正月行事かも知れぬと思つてお知らせする、イヤ飛んだ長い手紙になつた。おめでたう。

(丑の正月二日)

くもり空

櫻地に降るかはたれの
我を疑ふくもり空
神や人なる俤を
野におもひ寐の草の蔭
春の寂しさしみくと
身にもしみぬる獨居に
佐保姫、何を我胸に
秘めしや其と使に明せ

五尺手拭

『五尺手拭』は何人の作なるを知らず、文章の面白さま、寫して我筐底に藏め置
きしものなり。原書開卷には『新版當流』とあり、終りに『元祿三庚午年六月十
八日、大傳馬町新版』とあるのみにて挿繪もなく、極めて疎末なる本なり。小謠
に擬せしものならんが、俗謠俗語を自在に引きて、普通の謠曲、狂言の類とも異
り、又作者は京阪の人と覺しく、まゝ、京阪語を交へたり、例へば「鳴いたのだ」
を「鳴いたんだ」と云ひ、島原京六條の投節と云ひ、蛇を「くちなは」と云ふ類
少なからず、京阪の作を江戸にて翻刻せしものか。又本文は假名多く讀煩はしき
を以て、淨寫の際往々漢字を當筈めたり。只二三解し難き語あり、殊に結末の「は
ちく鹿子」は何の事か分らず、是等考證的の事は凡て世の博識の是正に俟つ事
とし、此文の面白き處を味はれれば、余が紹介の本意は達せしなり。

五尺手拭な染めて、己に呉りやうより宿に置き、抑も是は橋の下の鶉の鳥にて候、さても此頃、浪に魚ども餘多躍り跳ね候程に、小鮒くわへてふりしやりせばやと存候、道行見渡せば、佐渡と越後は筋向ひく、橋を架けふもの舟橋を、泊り泊りの一つ木や、身はあだなみと思へども、宿がよければ名もたぬく、詞「急ぎ候ほどに千里の行も一羽におこつて、渺々たる野に着いて候、これなる田川に翼を休め、嘴をも濕ほさばやと思ひ候、シテ「小霜おじや、物見しやう、畦のく、田の、畦の田く、の、畦の田の、畦の畦のはたを廻るとて、小田の蛙が鳴いたんだ、おもてなしに鳴いたんだ」我をちこちの山を眺め、畦の流にたゝずめば、岸にことなる藤山吹の、咲亂れたる面白さよ、水陸草木の花愛しつべし、何人を獨り菊を愛すと、心をのぶる折柄に、これなる畦の下草動き、茅花まじりの土筆、押分出て給ふは小霜とやらんを戀死せし正しく小田の蛙殿ごさめれ、荒痛はしや候、「嬉しくも仰せ候鶉の鳥かな、其小霜の君ゆゑにこそ、かやうに心が亂れ候」本より此身は畦

の小川、棚無小舟の二挺立、待乳の山にあらねども、まつを時雨にかゝる露をうたはゞやと存候「ロキ」ちつと左へ寄候べし、又さいぜんの詞の末に、もてなしに鳴いたんだとは、例の小霜をこひし玉ひての御事成べしシテ「仰の如く色里島原京六條の投節にも、下「下邊に蛙の鳴聲さげば有し其夜が思はる、おもて立名か立名の内か逢はて立つこそ立名なれシテ」その御詞の嬉しく候程に御禮に狂ひ見せ申さんと次第「草の葉笠を引かづきく、田川の波にくるはんツリ地」それ生とし生けるもの、何れか戀慕にまよはざるべき、色好まぬ男は玉の盃の底なき心地すと、吉田の捨坊も申しせしなり、凡そ好色一代二代の男、其外作せし品々の五人女に見えたるは、但馬や樽屋源五びやう、都のお三、武藏なる神田のお七に至るまで、胸の煙を富士にくらべ、田子の浦浪名を流して旅人馬士の砂名歌、幼兒の戯れにもうたふとかや、斯く心有る人倫にさへ、ましてや拙なき蓮の池の、葉裏に鳴さし蛙が身にも、深き思ひはありその海ハセ「三浦三崎のなまこめる、たはらこるびを始て身は朝顔の猪口の底

にも沈むといふも、なになれば、戀と云ふ字を大切に、思ふが故に身につもる雪を
 まろめて一つかね、なげさせ玉へばみさをの前、誰じやいの、そんなことはせんも
 のでございすに、君は二階のはん箱はしご、上我が戀はのぼりつめては降りぬぎ
 て、しゆす鬢はやる世の中に、野郎かげまの花姿、千筋なびさし柳の、その黒髪も
 糸鬢面影如何にはづかしや、それとても力なし、色道に立し浮名なり、我も思ひは
 同じ江の、逢瀬の縁のなど無さど、心あてに折らばや折らん春菊のをさまじとはせて、
 荒小霜戀しや、邪淫の悪鬼は身を責てく、其念力の骸骨となつて、底なる田川は
 三津河原の、水を飲まんとよるぼひよれば、水は忽ち火焰となつて、只さめくと
 泣くばかり、岸なる藤が枝——小蛇となつてく、蛙をまさ上げ責て曰く、汝愚か
 や空より下る雨をはこばずに、斯かる大濡、諸分は如何に、及ばぬ戀を高間の山の
 雲のかつらさ、名古屋山三、不破の伴左に問ふべしと、ゆふしてかけて千早振伊勢
 へ七度熊野へ三度、愛宕様へは月参りしても此通とは叶ふまじと、くちなは怒り

て七まとひ、まとひく〜て尾にて叩けば、其時蛙は苦しげに、天にあこがれ地に手
 をすりく〜他人ぶりく〜して泣くばかくり、あらいとほしやいとほらヲや、即時
 に蛙の青き衣の、むらさき染て江戸鹿子く、はちく鹿子となりにけり。

玉蟲草紙 (舊稿のお伽噺)

秋の千草の中にも萩はうつむいて、女郎花はすねて、薄はそはくして、菊はかしこまつて居る、花でも種々な姿をして居るが、秋の野の蟲、それも亦、蟲によつて姿も變れば、聲も違ふ。中にも玉蟲姫と云つて、虫の中でのかくや姫、傍の草木も光るほどの美しい蟲がある、他の蟲仲間、同じ蟲と生れたら、玉蟲ほどの姫を娶らんけりや生れ甲斐はないと云つて噂して居た。そこで或る月の良い晩に、露にぬれた草の上で蟲の會議を開いた。つまらぬ競争をして、玉蟲姫を仲間はずれのものに取られては残念だから、早く恨みつこない方法を考へて、玉蟲姫を誰れかの者にしたらい、だらうとの決議をした。さうすると、蝗は飛びくらをして勝つたものと云ふし、蜘蛛は宙乗が可いといふし、螳螂は劍術の勝負で定めやうといふし、胡蝶は踊りてといふし、松蟲は歌ひくらてといふし、蚤はかくれん坊てといふし、皆

各々自分勝手なことばかり云つてはてしがつかぬ。仲間では學者でもあるし、歌よみでもあるし、昔からの家柄を以つて敬まはれて居る蛙の大將、此の時、蓮の葉の上へ、ひよいと飛び上つて、集まつた蟲を見まはし、諸君の議論は區々でつまる處がない、誰か一人を撰んで其の方法の可否を斷て貰ふやうにしたら何うだらうと言出すと、他の蟲は皆蛙の説に賛成した。誰彼といふより蛙の言出したことだから、蛙を議長にしたら可といふことになつた。蛙はいろくの蟲の言ふことを聞いて、こほろぎが歌を詠んで歌合で勝負を定めやうと言ひ出したのを可と斷めた。蟲の中には不器用な奴も交つて居るから、ブツブツ小言を並べて居るのもあつた、矢張判者は蛙かなる事にして、蟲共は歌をよんだ、そして出来るに従つて順々に蛙の前へ来て、自分の作つた歌を吟詠た。

鈴蟲

鈴蟲の何故に鳴かぬと問ふてみれば神樂舞ふ子に鈴は取られた

蝶

生まれ〜葉の葉に生まれ蝶々の生まれ葉の葉に蝶々生まれ

さり〜す

さり〜す、さり〜すちよんと鳴く聲の聲の稽古に夜は明けてけり

機織

絹を織れ木綿を織れと機織の機降りる間もあらじとぞ思ふ

こうろぎ

山の薪、市の酒樽、菜の葉影、板敷せまさこうろぎの聲

芋蟲

ころ〜と芋蟲ころぶ芋の葉の芋は吾作の引抜いてけり

蜂

花と云ふ花をしぼりて甘き露を貯へて置く蜜の甕かな

蝗

逐へば飛び逐へば飛びして他の田へ逃げ了せたる瘦いなごかな

毛蟲

いたづらに青梅盗む娘子の袂の裏を這ふ毛蟲かな

蛙は一首一首注意して聞いて居た、未だ後へ追々吟詠る筈であつたが、忽ち中止せん

ければならぬ事が起つた。駈なれた轡蟲の知らせに依ると、蟲仲間が氣遣つて居た

玉蟲姫は、果して何者かに奪はれた。奪ひ取つて行つたのは何處の者だらうと、百

方詮義して見ると、蟲捕に來た女の子であつた、人間では力及ばぬと言つて、蟲の

歌會は解散した。月はだん〜高く上つて、草葉の露は玉を轉ばしたやう、さらく〜

と輝いた、更けて行くほど蟲の聲は高く聞えた。

捕られた玉蟲は女の子の箆筒の底へ收はれた、玉蟲の收はれてある箆筒へは、言合

して他の蟲は入らなかつた。それから後ち、女の子が美しい着衣を收つて置く箆

筒へは、屹度玉蟲を入れることになつた。

玉 蟲 終

『玉蟲』の編輯に就いて

女子文壇社主野口竹次郎氏から、何か女子の文章を作る参考になる書を編輯して呉れとの談話があつたので、それを幸ひに此の『玉蟲』一篇を本社から出版する事になつた。

美文なり詩なりに、女子又は家庭を材としたものを、吾作中から擇んで、此處に一冊を成すに到つた、詩は『文庫』文は『明星』などに掲げたものが多い、女子の雑誌に出たものも多い、是等の雑誌主任者に對して、轉載の自由を與へられたことを深く感謝す。

時代の黙移はいつも自分の作に對して、慊焉たらしめるが、殊に本書を編輯するに於て其の感が深い、吾詩に吾文に『玉蟲』以後、再び

『玉蟲』はなからう。不満足な子ほど可愛き所以、幸に諸賢の愛讀を仰ぐ。

三十九年四月 落花に埋れし原宿村に於て

河井 醉茗

明治三十三年五月十八日發行
明治三十三年五月十八日印刷

著者
發行者
印刷者

ひ

所有

著作權

正金六拾錢

東京市京橋區大鋸町十一番地
河井幸三郎
東京市京橋區野口竹次郎
野口竹次郎
全京橋區西紺屋町廿七番地
石川金太郎

發兌元 東京市京橋區大鋸町十一番地
女子文壇社 (電話本局六〇七番)

特別賣 東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、長明堂各書

(株式會社秀英印刷)

此次頁より女子文壇社發行の書目一覽を乞ふ

鈴木秋風先生著
太田三郎先生畫

(正價金四拾五錢直接申込に限
郵券代用一割増)

小説
美文

朝

晴

全一冊中判
上等紙印刷
本綴美裝本

次 目

- ▲箒 木 ▲枇杷の實 ▲蟬時雨 ▲田舎道 ▲春のひかう
 - ▲髻そり ▲野 性 ▲千袋賣 ▲江戸川 ▲野 菊
 - ▲青葉日記(花ぐもり、海酸漿、向の丘、音楽家、惻隱、寂寥) ▲遠 潮
- 挿 畫
薔 潮 の 音 薇
大 詩 潮 薔
川 集 音 薇
端

百花笑ひ百鳥歌ふ、樂しきは朝晴のすがた、大空を流
るく雲の、ちぎれく飛ぶを見れば、わだつみの庭に湧
きて、遠潮のかへるを聞けば、樂しきは朝晴のすがた

著編生先風松森小 攷專學文國

女 子 文 學

全二拾部(每卷讀切)一月一冊發刊大判美裝
根本を和漢洋の三文學に置き、体裁を最新式の編纂法に據り、女子の爲めに文藝獨習の強き手引となるもの全部十二卷を之座右に具へ置け文藝上の智識は囊中に物を探るが如く、名作雄篇を成すに無比の重寶たり、敢て天下の諸嬢に此の書を推薦す。

全 部 概 目
版出リヨ月五年九卅

- ▲第一編美文作法
- ▲第二編新派和歌作法
- ▲第三編新派體詩作法
- ▲第四編新派俳句作法
- ▲第五編女子消息文範
- ▲第六編女子普通文範
- ▲第七編言文一致文範
- ▲第八編普通國文典
- ▲第九編女子口語文典
- ▲第十編女子修辭法
- ▲第十一編女子文學者列傳
- ▲第十二編女子國文學史

女子文學 第一編 (五月下旬發刊)

美文作法

全一冊
大判二冊
價目以上
郵稅四錢

附錄 古今名家美文範
本書は著者が、現今の女子の女子師範、高等女學校、其他各種の女文學趣味を鼓吹せんのを考にて、女子師範、高等女學校、其他各種の女最困難を感じる文章の作法を懇切に説明指導せられたる明治の女學生に、實に坐右の寶典なり。

每號皇太子妃殿下賜上覽——本誌の光榮



每月一回 一日發行
年四回 臨時增刊
(二、五、八、十一月)

懸賞文 滿載

表紙口畫皆鮮麗
大判百廿頁以上
定價拾錢——送無料

二六號 五月一日發兌 (三宅氏水彩畫。寫真版數葉。清方氏繪葉書。木版密書入)

二見本 壹冊拾錢●詳細は本誌に就て見よ

文學士 三
中内蝶二 版

懸賞文集

全一冊四六版洋裝
上等紙四百二十頁
正金廿五錢
送無料(郵券壹割増)

- 目次
- 短篇小説(廿七)
 - 消息文(三十五)
 - 抒情文(三十)
 - 敘事文(三十二)
 - 論文(十五)
 - 新躰詩(廿七)
 - 和歌(三十五)
 - 俳句(四十四)
 - はがき文(廿八)
 - 圖畫(廿七)
 - 附録——大家文集(七) 計十一項：三百〇七題

本書は女子が文章を練り詩歌を學ぶに模範的作本書として唯一の寶典たるべく殊に附録として諸大家の作文上の心得となるべき名文を載せ修養の便に供したる無比の良書也

1500

